SQUARE ENIX.



ドラッグ オン ドラグーン ノベルプレリュード

「だいたい、乳がデカい女は頭が悪いって言うじゃない？」

今日、はじめて自分でお人形をつくりました。つくり方はヒトのまねだけど、ワタシがつくったワタシだけのお人形です。思ってたより、ずっとじょうずにできたので、ワタシはとってもうれしくなりました

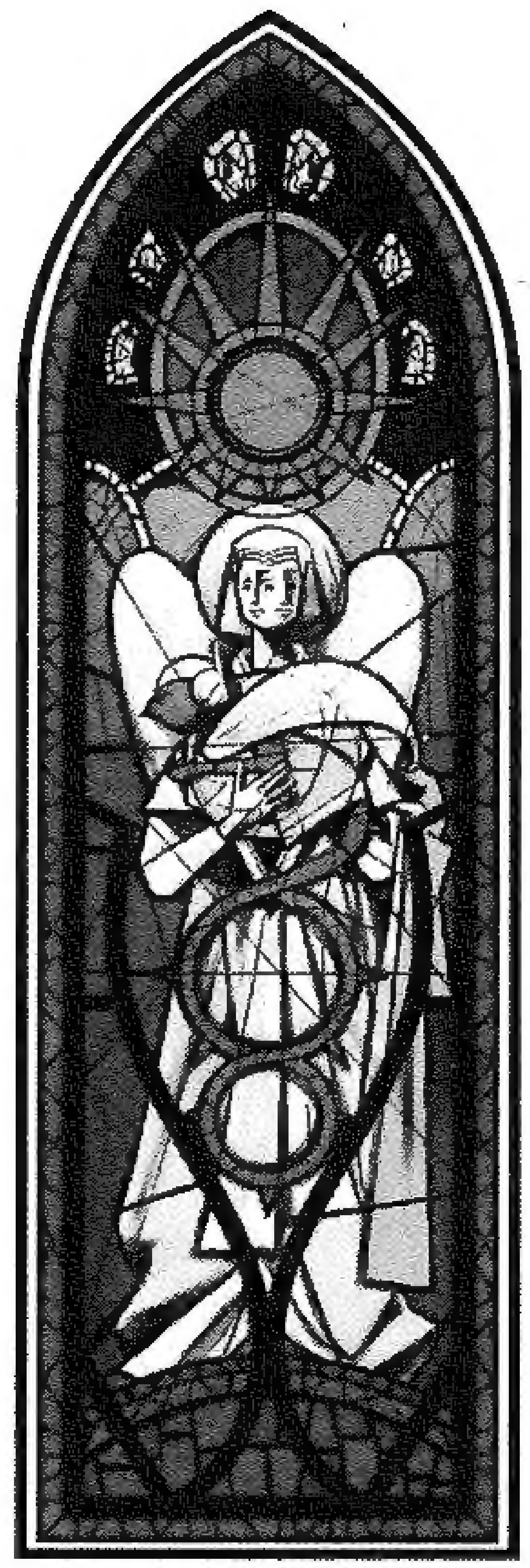
今日はずっと、「ほっぺたの中身」をさがしていました。うんとやわらかくて、手ざわりがいいモノ。

ウタウタイのチカラとは何なのだろう？　世界の調和を保つためのもの、と物心ついたときには理解していたけれども、私はそれをどこで覚えたのだろう？　誰に教えられたのだろう

平定してからいくらも経っていない国である。しかも、領主の権力がとりわけ強い国だった。あらゆる富と力とが領主とそこに群がる連中に集中していた。それを奪われた彼らは、さぞや私達を恨んでいることだろう。元はといえば、民から不当に吸い上げたものなのだから、奪われたというのは筋違いな話だが。

「うるせえ！　牛女！　草でも食ってろ！」

ドラッグ オン ドラグーン ノベルプレリュード



DRAG-ON DRAGOON
Since 2003

DRAG-ON DRAGOON NOVEL PRELUDE

CONTENTS

※本小説集には多くのネタバレが含まれています。ゲームプレイ後にお読みになることを推奨します。

挿画：藤坂公彦　　カバー・表紙デザイン：株式会社metamo 渡部 岳　　本文デザイン:株式会社wonder

0 ゼロ

終わりの雨と始まりの花

こんなところに花なんて咲いていたっけ？

そう、愚かだ。蜂起するどころか、武器を手に取ることすらできずに事は露見した。仲間の密告によって。他人なんて信用するからだ。裏切らない人間なんているわけがない。首謀者であった五人が捕らえられ、拷問にかけられた。企ての全容と加担した者達の名を白状すれば解放してやると言われたらしいが、もちろん、嘘っぱちだった。騙される人間というのは何度でも騙される。

もっとも、すぐに白状した者も、彼女のように頑として口を割らなかった者も、ぼろ布のようにずたずたにされて、こうして石畳の広場に転がされている。騙されようが騙されまいが、結果は同じだったわけだ。領主の彼らに対する扱いは、公正とは言い難いものの公平だった。

ひとつだけ、公平でないことがあるとすれば、民を虐げる領主を討とうとしたご立派な五人と、ケチな人殺しの私とがこうして並べて鎖に繋がれていることだろうか。これはどう考えても理に適っていない。

私は彼らと違って、拷問にかけられることもなかった。ご大層な計画もなければ、仲間なんて一人もいなかったから。白状することなど何もなかったおかげで、骨を砕かれたり、爪を剥がされたりすることもなかった。ただ、背中の皮が跡形もなくなるくらい、鞭で打たれただけで。

背中一面に火の手が上がったかのような痛みも今は消えていた。何の感覚もなかった。

雨の日は、いつも最悪だった。
しつこいほどに降り続く雨をぼんやりと眺めながら、そんなことを考えた。不意に笑いが込み上げてくる。
だったら、晴れた日が最悪じゃなかったとでも？
「どうした……の……？」
傍(かたわ)らから問う声があった。雨の音に容易(たやす)くかき消されてしまうほど、か細い声だった。
何が、と訊き返して少しだけ後悔した。質問を質問で返してくる人間が私は嫌いだった。そんな奴は二度と口が利けないようにしてやった。いつも。
「だって、あなた……泣いてる」
「キミの勘違いだ。笑ってたんだ、私は」
無理もない。彼女には私がどんな顔をしているのか、わからないのだ。彼女は視力を失っていた。両の瞼(まぶた)をこじ開けられて、眼球に針を突き立てられたのだという。しかも、彼女に対して行われた拷問(ごうもん)はそれだけではなかった。手のひらと足の裏は何度も焼き鏝(ごて)を当てられたせいですでに腐臭を放っていたし、四肢(しし)の関節はどれも破壊されていて寝返りすら打てない。
年端(としは)も行かない少女に惨(むご)いことをする、とは言わない。領主なんてそんなものだし、だからこそ彼女と彼女の仲間達は蜂起しようとしたのだろう。愚かしくも。

年上の女ばかりではなくて、私と同じくらいの少女達もいた。そのうちの一人と私は仲良くなった。彼女は私を「薄紅（うすべに）」と呼び、それで私は自分の瞳の色を知った。私がそう言うと、彼女は「鏡を見たことがないの？」と呆れた。そのとおりだった。私は自分の顔に興味などなかった。

私は彼女を「紫紺（しこん）」と呼ぶことにした。自分の顔はどうでもよかったが、彼女の瞳の色は綺麗だと思った。薄紅と紫紺。それが私達二人の間だけの呼び名だった。

あるとき、紫紺が「金を盗んで逃げよう」と言い出した。二人でなら、何でもできそうな気がしたから、私はうなずいた。どこへ逃げるとか、逃げた後どうするとか、そこまでは考えなかった。

この企ては思いのほかうまくいき、私達は持てるだけの金を持って、町の外に出て橋を渡り、川向こうまで逃げた。そこでは、男が馬を用意して待っていた。男の顔には見覚えがあった。紫紺にご執心だった客だ。なるほど、紫紺が「川向こうまで逃げれば、後は何とかなる」と言っていたのはこういう理由だったのかと納得した。

てっきり私も連れて行ってくれるのだと思っていたが、それはとんでもない勘違いだった。最初から、二人は私を殺すつもりだったのだ。紫紺一人では運べる金も限られているから、私にも声をかけた。それだけのこと。

「悪く思わないでね、薄紅」

冷たい雨に打たれているというのに寒さも感じない。もうすぐ死ぬからだとわかっていても、それはひどく奇妙だった。

「ろくでもない人生だったな……」

笑いが止まらない。最良の日なんて一日たりともなかった。雨の日も晴れの日も最悪だった。物心ついたときから、いや、生まれ落ちたその瞬間から最悪だったに違いなかった。

一番古い記憶は母親の怒鳴り声で、その後も殴られた覚えしかない。満足に食べさせてもらっていたかどうかも怪しい。言葉を話すことより先に、私は食べ物をかすめ取ることを覚えていたからだ。きちんと食事を与えられていたならば、盗む必要などなかっただろう。

私の母親が特段にひどい女だったわけじゃない。温かい食事と寝床を用意してもらえる子供など、幸運な一握りだ。どこぞの貴族様のお家にでも生まれなければ、そんな生活は望むべくもない。何かの間違いで生まれてきて、厄介者扱いされながら育ち、真っ当じゃない大人になって、考えなしに子を孕む。ほとんどの女がそんなものだろう。私の母親は自分が育てられたのと同じやり方で私を育てたに過ぎない。

曲がりなりにも男の相手ができる年齢になると、当然のように母親は私を売り飛ばした。後になって振り返れば、情けなくなるほどの端金で。行き先はお決まりの淫売宿。母親とよく似た女達がしみったれた男達の相手をしていた。

つ上げずに死んだ。
持てるだけの金を持って、夜明け前に私は町を出た。もちろん、追っ手は来なかった。が、追っ手よりも厄介なものが出た。野盗だ。連中はいともあっさりと私を捕らえ、持っていた金を大喜びで奪い取った。命までは奪われずに済んだとはいえ、またしても「うまくやれなかった」ことが悔しかった。
売り飛ばされて娼婦に逆戻りする前に、どうにか連中の隙を見て逃げ出した。今度は金を持ち出す余裕などなかった。いや、下手に金など持ち歩かないほうがいいと考えた。持っていれば奪われる。必要な品は購うのではなく、盗めばいい。何も持たずにいれば、誰も私から奪えない。
ただひとつ、奪われるものがあるとすれば私自身だ。母親が私を売ったように、野盗の頭が私を売ろうとしたように、女である以上、常に略奪の対象となる。こればかりはどうしようもなかった。置いていくことも捨てることもできないのだから。
紫紺のように男を作って自分を守らせるという選択肢もなかったわけではない。が、他人は嘘をつく。他人は裏切る。だったら、守ってもらえなくてもいい。自分の身は自分で守る。
いや、たった一度だけ、一人だけ、共に暮らした男がいた。あの薄汚れた淫売宿の客と再会したのだ。遠い遠い、見知らぬ町で。男は私の顔を覚えていて、私も男の顔を覚えて

そう言って紫紺はにっこりと笑った。いつもと変わらない微笑みだった。ああそうか、この笑顔の下で紫紺は私を殺す算段を付けていたのだと、ようやく気づいた。

そのとき、追っ手がやって来なかったら確実に私の命はそこまでだった。二人は慌てて逃げ出し、私は捕らえられた。

紫紺を恨む気持ちはなかった。自分自身の間抜けさ加減に腹が立った。なぜ、他人の言葉など信用したのか。騙された私のほうが悪いに決まってる。やりようによっては、川向こうで死んだのは紫紺とあの男で、逃げ延びたのは私のほうだったかもしれないのに。次はうまくやらなければ、と私は思った。

その機会が訪れたのは、幾月か後のことだった。金を持ち逃げするのはうまくやった。たぶん、紫紺よりもずっと。追っ手がかからないように、女衒も下働きの連中も女達も皆殺しにしたのだ。難しくはなかった。皆が寝静まった頃を見計らって、一人ずつ殺せばよかった。

真っ先に女衒を殺し、次に殺したのは荒事のために雇われている男達だった。酒樽に毒を投げ込んでおいたおかげで、男達は半分死んだようになっていた。非力な私であっても、動かない男に止めを刺すくらい造作もない。

男達を片づけてしまえば、残りはあっという間だった。女は血の匂いに鈍感だ。寝ている真横で夥しい血が流れたからといって、それで目を覚ます女はいない。誰もが悲鳴ひと

だ。
そのときになって、男に気を許していなかった自分に気づいた。寝食を共にする日々を重ねて、殺意を捨てたつもりでいたけれども、そうではなかった。いつでも手の届くところに刃物を隠していたのだから。
こうして、また私は一人になった。食べ物や衣服を手っ取り早く盗みながら、当てもなく旅を続けた。話に聞いたとおり、病の進行は遅く、旅も略奪も殺人も十分に可能だった。盗んだ品の持ち主はその場で殺した。女であろうと、年寄りであろうと。
「食べ物もお金も差し上げます。だから、殺さないで。助けて……」
何度もそんな言葉で命乞いをされた。不思議だ。殺されそうになったとき、誰もが同じ表情を浮かべる。私もこんな目で紫紺を見ていたのだろうか。いや、私は命乞いなんてしなかった。
「もしも助けたとしたら？　キミ達は間違いなく私を恨む。いつか私を殺そうとする」
「そんなことない……」
「はずないじゃないか。目の前で母親を殺されてるんだ」
それも、私の母親のような女じゃない。きっといい母親だったのだろう。身を挺して娘達を守ろうとしたのだから。
「悪く思わないでね、なんて身勝手なことは言わない」

いた。早く殺さなければ、と思った。女衒も女達も皆殺しにされたはずなのに、私一人が生きているということの意味がわからないほど、頭の悪い男ではなかったからだ。
なのに、なんとなく殺せなかった。見知らぬ町の片隅で、私はその男と暮らした。頭の悪い男ではなかったが、もちろん真っ当な人間でもなかった。男は錠前破りを得意とする泥棒だった。二人で荒稼ぎをしては面白可笑しく日々を過ごした。こんな暮らしも悪くないか、と私は男への殺意を捨てた。
その暮らしも長くは続かなかった。病に罹ったのだ。ゆっくりと、しかし確実に身の内を蝕み、決して治ることはないという死病。しかも、人から人へと感染るという。
死病を恐れた男は私を捨てた。気持ちはわからないでもないから、それだけなら私は男が去るに任せただろう。だが、それだけではなかった。男は私を役人に売ろうとした。あの淫売宿に押し入った「賊」には賞金が掛けられていたらしい。
バカな男だ。私は病に罹っていることが判明したばかり、まだまだ症状は軽いものだった。寝起きがひどく悪かったり、夕刻になると寒気がしたり、思い出したように嫌な咳が出たり……。その程度だったから、人を殺すのに何ら支障はなかった。
寝入ったところを見計らって捕縛しようとした男を返り討ちにするのは容易かった。病のせいで眠りは浅く、何より私は殺気というものに過敏なたちだった。考えるよりも早く、私は男の首を掻き切っていた。何が起きたのかわからない、という顔をして男は死ん

「どうして？　訊きたいのは私も同じだ」
少女の視線を背中に感じながら、私はテーブルからパンを取った。ひどく空腹だったのは嘘ではない。だから、この家に押し入った。裕福そうな家で、しかも食事時だったから、すぐに空腹を満たせるだろうと踏んだ。それだけの理由だ。でも。
「どうしてだろうな」
皿の料理を手づかみで食べ、水差しから直接水を飲んだ。この家の料理人は腕がいい。
「なぜ、私は殺すんだろう？　これだけ殺してきたのに、わからない」
床に転がった少女の首に話しかける。自分が殺してきた人数などいちいち覚えていない。数えるつもりもなかった。とにかく数え切れないほど殺した。それだけの命を奪ってきたのに、こんな単純な問いにさえ答えられない。
なぜ殺すのか？　なぜ？
「もしかしたら、それが知りたくて殺しているのかもしれないな」
その答えに全く納得した様子もなく、少女の両眼は私を睨(にら)んでいた。

その後も私は同じ暮らしを続けた。いつしか、理由や答えを探すこともなくなった。あたかも呼吸をするかのように奪い、殺した。
ただ、殺した人数がおそらく三桁(さんけた)を超えた頃から、私の存在は人々の知るところとなっ

そして、私は身を寄せ合って震えている姉妹を殺した。命を奪う瞬間には恨まれ、憎まれたに違いないが、これで復讐の刃を向けてくる人間はいなくなった。

中には、命乞いをしなかった者もいた。私よりいくつか年下の少女だった。瞳に怒りを滾らせて、彼女は私に食ってかかった。

「どうして!? どうして、こんなことするの!?」

「腹が減ったから、かな」

「ふざけないで！」

「ふざけてなんかないよ。私は死にそうなくらい空腹で、なのに食い物を買う金がない」

「だったら、こんなことしなくても！」

彼女の目の前には父親と兄の死体が転がっていた。少し離れたところに料理人と思しき女の死体も。手の掛かる者から先に片づける。結果、最後に残るのはいつも子供か年寄りになる。

「お金だけ取って逃げればいいじゃない！」

「ああ。うん、そうだね。以前は自分を恨む人間を増やしたくないって思ってたけど、そういう問題でもないような気がしてきた。どうしてだろう？」

疑問を呈しつつも、私は少女の首を刎ねた。息絶えた後も彼女は目を見開いていた。その両眼に怒りの色を残したまま。

られずにいる中、彼女だけは毅然とした口調で「私達は間違っていない」と繰り返していた。

その声も次第に弱々しくなっていった。ここに引き出されたとき、彼女は誰よりも衰弱していた。気力だけで命を長らえているのは明らかだった。

相手が視力を失っているのをいいことに、私は無遠慮に傍らの少女を眺め回していたのだ。正義感が強くて、生真面目な、凡そ私とは正反対の少女。こんな場所で隣り合っているのが不思議に思えてならなかった。

やがて彼女は私に名を尋ねた。私がうっかり咳き込んでしまったせいだ。この病特有の嫌な音の咳だったから、彼女は隣にいるのが仲間ではないと気づいたのだろう。

「あなたは誰？　名前は？」

名前なんてない、と私は答えた。私には何もない。金もなければ家もない。家族も友人も恋人も。何ひとつ、ない。見事なまでに何ひとつ。残っているのはこの命だけだが、もうすぐそれも消えてなくなる。何もかも。差し引きゼロだ。くだらない。

そうだ、くだらない一生だった。生きてきた意味なんて何もない、空っぽの日々。振り返ってみればバカバカしくて、笑いが止まらない。

泣かないで、とまた声がした。

「笑っ……てる、んだ」

ていった。押し入った家の者は皆殺しにしていたから、たいした痕跡も残っていないはずだったにも拘わらず。まあ、隠す気もなかったから、誰かに姿を見られていたのだろう。子供や年寄りに至るまで容赦なく殺しているのが若い女で、それも一人きりだということがわかってしまうと、そこから先は早かった。たちまち私の人相書きが出回った。旅の商人達が噂を広め、どこの町でもどこの国でも人々は「薄紅色の目をした魔女」を捜した。捕らえれば遊んで暮らせるほどの賞金、情報だけでもそれなりの報奨が約束されていたからだ。

そして、私は捕らえられた。病で動けずにいるところを囲まれたのだ。その頃にはさすがに病状は重篤になっていて、逃げるどころか、抵抗することもできなかった。仰々しく武装した兵士達が大げさに喚きながら、私の手足に縄を掛けた。

どうせ病で死ぬほうが先だろうという読みは外れ、私は刑場に引き出された。殺した人数と同じ数の鞭打ちというのが私に下された刑罰だった。我ながらしぶといもので、背中の皮がずたずたになり、肉が裂けるまで鞭で打たれても死ななかった。

もっとも、「殺した人数」が正確なものだったら、私は死んでいただろう。実際の数よりもずいぶん少なく見積もられていたせいで、死に至る前に刑は終わった。

もちろん、それで許されるはずもなく、私は鎖で繋がれ、広場に放置された。五人の謀反人達と共に。私の隣に繋がれていたのが、例の少女だった。他の者達が呻き声すらたて

私達は間違っていない、という少女の声が耳に蘇った。そう、彼女は間違ってなんかいなかった。間違っているとしたら、この世界のほう。人を人とも思わない領主がいて、平気な顔で人殺しができる私がいて、弱い者達のために立ち上がった人々が虫けらのように殺される、この世界。

こんなの、おかしいじゃないか。道理に合わないじゃないか！

唐突に怒りが湧いた。いや、唐突にではなく、私はずっと怒っていたのだ。自分では気づかなかったけれども、怒っていた。私はこの世界を憎んでいて、呪っていた。もう思い出せないほど遠い昔から。

叫びが喉を震わせたように感じた。ごぼり、と生温かいものが口からこぼれた。私が吐いたのは絶叫ではなく血だった。このクソッタレな世界に私は殺されようとしている。許せない。許すもんか。おまえが死ね！　おまえ達のほうが死んでしまえ！　死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね……！

気がつくと、目の前に花があった。私と少女の骸の間に、薄紅色の花が咲いている。いつの間に？　こんなところに花なんて咲いていたっけ？

花が雨に打たれて揺れている。全く知らない花なのに、どこかで見たような気もする。自分の瞳とよく似た色だから、そんなふうに感じるのかもしれない。それとも、これは天国に咲くという花で、もしかして、私はもう死んでいたりするんだろうか？

まともに息ができないせいで、しゃくりあげているようにしか聞こえないのだろう。次の瞬間に呼吸が止まっても不思議はないな、と思う。

「ほんとに？」

「ああ」

安堵したような吐息が聞こえた。いつしか雨は小降りになっていた。次の瞬間、彼女の体が痙攣した。それはほんのつかの間のことで、すぐに動かなくなった。

「おい……」

答えはなかった。

「私が最後の一人、か」

最後の一人だけは、残り五人の死体と共に生きたまま焼かれることになっていた。それを聞かされたとき、一人はその場で舌を噛み切った。広場に引き出された時点でもう一人死んだ。雨が降り出す前にまた一人が死に、土砂降り雨の中でさらに一人が死んで、私と少女の二人が残った。

この雨で火炙りは無理だろうから、私は五人の死体と共に生き埋めにでもされるのだろう。それが彼女でなかっただけ、良しとすべきなのかもしれない。最後の最後まで他人を気遣った少女が一番惨い死に方をするなんて、間違っている。

間違っている？　何が？　誰が？



違う。私が死んでも天国になんて行けるはずがない。死にかけているせいで、私は幻覚を見ているに違いなかった。

幻覚でもいい。もっと間近に見たい。この手で触れたい。花を贈られたことなんて一度もないし、花を欲しいと思ったこともないけれども、この花は好きだ。

視線ごと絡め取られる気がした。瞼を閉じることすらできず、私はただただ花を見つめる。なんて綺麗なんだろう……。ろくでもない人生だったけれども、こんな花を見ながら終わるのならば、悪くない。

視界いっぱいに咲く花へと、私は静かに微笑んだ。

V ファイブ

My Favorite Things

るとすれば、少しだけ欲しいとか、ものすごく欲しいとか、そんな違いだけ。
ものすごく欲しいモノは、もちろん、キレイな装身具と服と靴。装身具は銀より金がいいわ。それから、きらきら光る宝石がたくさん。クルミくらいのサファイアに小さなアクアマリンとダイヤを散りばめたブローチとか、エメラルドをぎっしり嵌め込んだ金細工のネックレスとか。
服はレースが付いているものが好き。総レースのローブなんて、羽織っただけで失神しそうになるくらい好き！　もちろん、レースの付け襟もショールもハンカチも大好きよ。レースって、編み上げるのに手間と時間がかかるんですって。ほんのちょっと縁飾りにレースを使うだけで、とんでもなく値段が跳ね上がるってフォウお姉様が言ってらしたわ。

「この服一着分のお金があれば、貧しい一家が何日も何日もお腹いっぱいご飯を食べられるのよ？　それがわかっても、あなたはまだ着飾りたいの？」

フォウお姉様はいつもとても正しくていらっしゃる。だから、私はこう答えましたのよ。

「ええ。お姉様の仰るとおりね。このドレスは手放すことにしますわ」

それに、あのレースの縁飾りのドレス、もう飽きてしまったんですもの。
それより今は、リボンのたくさん付いたドレスがお気に入り。薄くて繊細なシルクの蝶

この世界は、私の欲しいモノと、ものすごく欲しいモノとで出来ている。
なんて、これはトウお姉様の真似なんですけれども。
「この世界はね、わたしの好きなものと、ものすごく好きなものとでできてるんだよ」
いつだったか、トウお姉様はそんなことを言ってらしたから。
じゃあ、私にとって、この世界は何で出来てるのかしら？　私はトウお姉様ほど優しくはないから、この世界の何もかもが好きなんてことはないのだけれど。
ええ。嫌いなモノなら、いくらでも。おいしくない食べ物、キレイじゃない服、つまらないことばかり言う人達。
でも、嫌いだから欲しくないってわけじゃありませんのよ。おいしくない食べ物だって、料理の仕方が間違ってるだけかもしれないでしょう？　トウお姉様なんて、サンドワームの胃袋を煮込んで、それはそれは美味なスープをこしらえてくださいましたもの。塩漬けにしたり、日干しにしたり、何日も煮込んだり……とにかく、とっても手間がかかったんですって。
キレイじゃない服だって、装身具をたくさん付けて着てみたら案外、似合うかもしれないし、つまらないことばかり言う人だって、下僕としては使えるかもしれないわ。ひとまず自分のモノにして、いろいろ試してみないと、わからない。そうではなくて？
だから、この世界には私の欲しくないモノなんて、ひとつもないんじゃないかしら。あ

「だって、ファイブがごそごそやってるからさ」
「あら、ごめんなさい」
「別にいいけど」
大きなあくびをしながら、伸びをする姿も愛らしいこと。私、この子が可愛くて仕方ありませんのよ。お人形さんみたいにキレイな顔なんですもの。
あ、スリイお姉様がお作りになる兵隊人形ではなくてよ。もっと普通で、ちゃんとした、可愛い女の子のお人形のこと。
いいえ、人形よりもディトのほうがずっと可愛いわ。肌は雪のように白くて柔らかで、二つの瞳はまるで輝く星のよう。ちょっと癖があって綿毛みたいにふわふわした髪なんて、いつまででも撫でていたいくらい。私にとって、ディトは一番のお気に入りで……一番のオモチャ。
「まーたドレス選び？　朝っぱらから？　ファイブって物好きだよね」
この口の悪さも好き。こんな愛らしい子がこんな小憎らしいことを言うって、意外性があって楽しいわ。男と女の関係には意外性って大切だと思いますのよ。ベッドの中と外は別の顔でないとね。
まあ、それはさておき。
「一日が短すぎるんですもの。少しでも早起きしなくっちゃ」

結びと段飾り。それが袖にも身頃にもたくさん！　可愛らしいでしょう？　リボンと同じ色の飾り帯をちょっときつめに結んで、私の発育のいい胸を強調して。うっとりするくらい素敵じゃなくて？

きっと、このリボンの服も高価なんでしょうね。貧しい一家が何日くらい、ご飯を食べられるかしら？

でも、私が着飾るのをやめたからって、貧しい人達がお腹いっぱい食べられるかっていうと、それは別の問題だと思いますのよ。だって、私の衣装部屋にあるドレスはお金を出して買ったわけではないし。前の持ち主を倒したから、私のモノになっただけ。

国の人達からお金を搾り取って無駄遣いしたのは、私じゃなくて、前の領主ですもの。

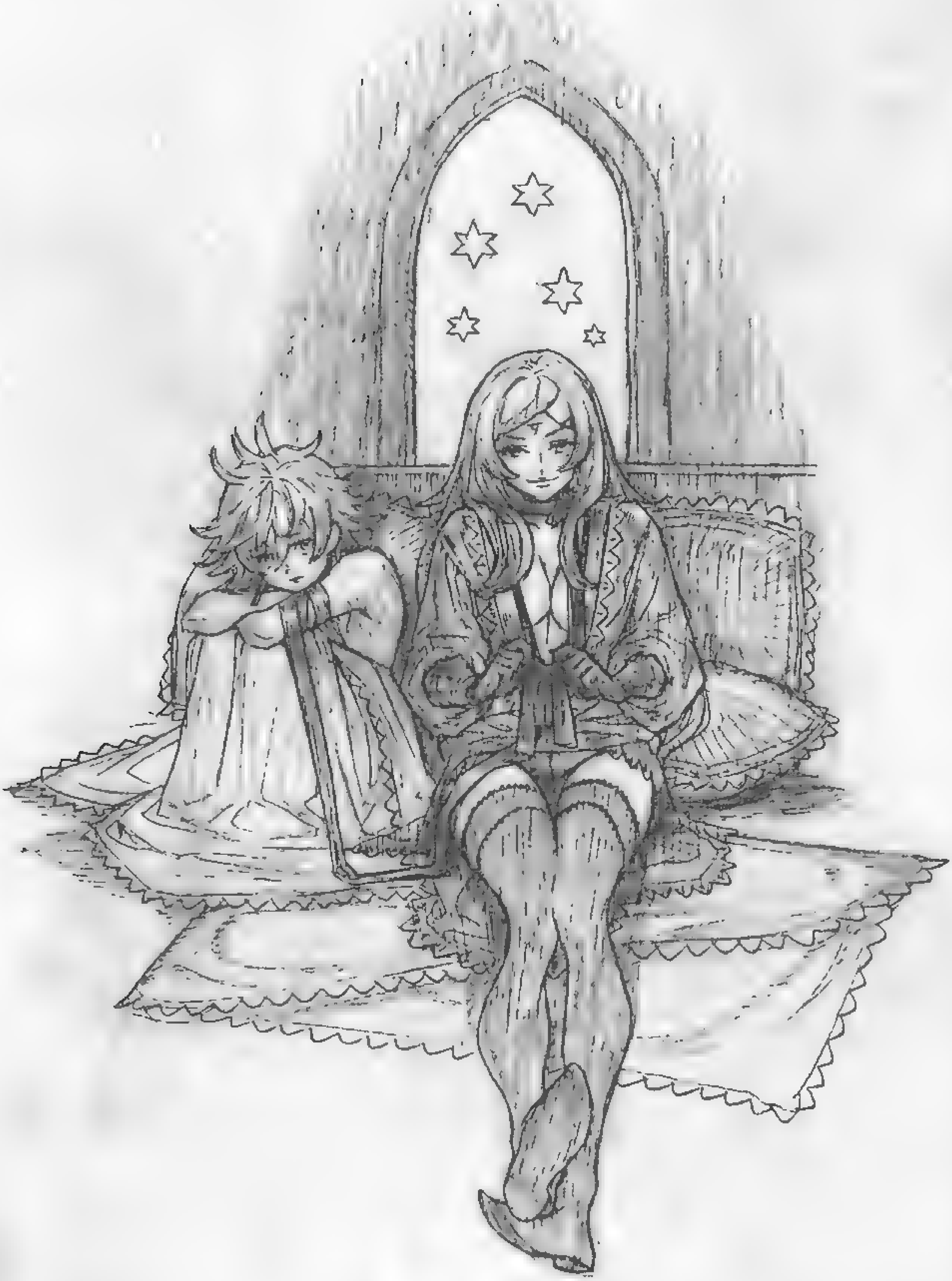
それより、今日はどれを着ようかしら。リボンのドレス？　こちらのダマスク織りのドレスも捨て難いわ。金の糸と銀の糸の模様織り、私の髪によく映るものね。それとも、袖口と裾にぐるりと黒貂の毛皮をあしらったドレスがいいかしら。それとも……。

「んー？　ファイブ、もう……起きてたんだ？」

真後ろから聞こえた声は、私の使徒のもの。可愛い可愛いしもべ。この子も私のお気に入り。でも、なんて眠そうな声なのかしら。

「ディトはまだ眠っていらっしゃいな」

子供はたっぷり睡眠を取らないとね。それでなくても、ディトは夜更かしさんだもの。



「そりゃあね、毎日毎日三回も四回も着替えてたんじゃ、時間も足りなくなると思うよ。夜まで同じ服を着てればいいのにさ」
「ダメよ、そんなの！　こんなにたくさんドレスがあるのに、一日一着だなんて！」
他に着るモノがないとか、旅先にいるとか、そういうやむを得ない事情があるならともかく、そうじゃないなら、一日中同じ格好でいるなんて考えられませんわ！
「ねえ、ディト。どのドレスがいいと思う？」
リボンのたくさんついたドレスに、金糸と銀糸のドレス、毛皮の縁飾りのドレス。並べて見せても、ディトはあくびをするばかり。
「ファイブが好きなのにすれば？」
投げやりな言い方ね。つまらなそうな顔をして。せっかくの可愛い顔が台無し。何がそんなに気に入らないのかしら。ああ、わかったわ！
「もしかして、ドレスは脱がせるのに手間がかかるから嫌い？」
「いや、それは……」
「何も着てないほうが楽だって、遠回しに言ってるのね？」
「そうじゃなくて……」
「私は別に着衣のままでも構わなくてよ？」
「違うから！」

なくてもいいでしょうに。私、ドレスを取りに行くのが遅いとか、そんなことで腹を立てるような主ではなくてよ。

衣装部屋からため息が聞こえたような気がしたけど、気のせいね。ディトが私にとって申し分のない使徒であるように、ディトにとって私は申し分のないウタヒメですもの。

ディトがうやうやしく捧げ持ってきた青いドレスを広げて、鏡の前へ。光沢のある布地に細かい刺繍、身体にぴったり沿った仕立ての異国風。

ええ、これも素敵。裾の両脇に大きく切れ込みが入っていて、歩くたびに脚が見える大胆なドレス。フォウお姉様はきっとお好きではないわね。下品な恰好はおやめなさいって叱られてしまいそう。

「このドレスも素敵ね。でも、他のが素敵じゃないかっていうと、全然そんなことないんですもの。困ってしまうわ」

リボンのドレスと、ダマスク織りのドレス、毛皮の縁飾りのドレス、この三着も捨て難くて。そこに青い花柄刺繍のドレスまで加わったら、選べないわ。どうしましょう？

「いっそ身体が三つか四つくらい欲しいわ。そしたら、全部一度に着られるのに！」

「身体が三つか四つ!?　それ、本気で言ってる？」

「もちろんよ」

「……悪夢だ」

「私が上になればいいだけですもの。それとも、立ったまま後ろから？」
「だーかーらー！」
「それって、遠慮してるのかしら？　誘ってるのかしら？」
遠慮してるのかもしれないわ。ディトは使徒ですもの。使徒はウタヒメの奴隷で、ウタヒメの言葉には逆らえない。ひたすらウタヒメに仕える存在。昼も、夜も。
「ねえ、遠慮なんてしなくていいのよ」
「ドレス！　どのドレスがいいかって話だったよね⁉」
まあ。ディトったら、顔を真っ赤にして。恥ずかしがってるのかしら。可愛いわ。ぎゅうっと抱きしめて、押し倒したくなるくらい。
「あれ！　あの真ん中のやつがいい！　キンキラキンの！」
「ドレスはもういいわ。それよりディト……」
「あー、だったら、別のヤツ！　ほら、いっぱい刺繍が入ったドレス！　青い花柄の！　あれってまだ着てなかったよね⁉」
青い花柄の、ちょっと変わった刺繍。そうそう。言われてみたら、あのドレス、まだ袖を通していないんだったわ。
「ファイブはここにいなよ！　ドレス、僕が出してくるから！」
私の腕からするりと抜け出す様子は、まるで猫みたいね。そんなに慌ててベッドを降り

「ディト、それは三倍じゃなくて二倍でしょ？」
それに、どちらにしますかってことは、どちらも用意できるってこと。でなかったら、そういう尋ね方はしませんものね。だったら、両方食べたいと思うのは当たり前のことではなくて？
「でもさ、もしも、焼いた肉と茹でた肉と蒸した肉、どれにするって訊かれたら、やっぱり全部って答えるよね？」
「そうねえ。そういう質問だったら」
「じゃあ、焼いた魚と蒸した魚と揚げた魚と煮た魚、どれにするって訊かれたら？」
「全部、かしらね？　いやぁだ。なんだか急にお腹がすいちゃったわ。朝食はまだかしら」
「人の三倍どころじゃないよ、ファイブの食欲は」
でも、それは私の食欲のせいではなくってよ。美味しい食べ物が存在しているということ、そのものが原因だと思うの。いくら私でも、最初から存在していないとわかっているモノまで食べたいなんて言いませんもの。
そうね、たとえ目の前になくても、どこかにあるとわかっているならば、世界の果てまでも探しに行くでしょうけれど。
ええ。美味しいモノを探しに行くのは大好きよ。悪者を倒しに行くとか、魔物を退治に行くとか、そんな旅よりずっと楽しくて、わくわくしますものね。

ディトったら、この世の終わりみたいな顔をして。いったいどんなことを思い浮かべたのかしら？

「私はいい考えだと思うわ。身体を三つにする魔法がないかどうか、ワンお姉様に訊いてみましょうよ」

ワンお姉様は、いつも教会の地下にある書庫で難しい本ばかり読んでらっしゃるから。もしかしたら、そういう魔法もご存じかもしれないわ。

「身体が三つあれば、どのドレスにするか迷うこともなくなるし、おいしいモノだって三倍食べられるでしょう」

「今だって人の三倍くらい食べてると思うけど？」

「そんなことなくてよ」

確かに、私はよく食べるほうだと思うけれど。だって、空腹感って好きになれなくて。なんだか寂しい気持ちになるんですもの。それがイヤで、お腹がすく前に何か口に入れたくなってしまうの。

だからといって、人の三倍はないと思うわ。なのに、ディトは意地悪そうな笑いを浮かべるばかり。ああでも、その意地悪な表情もとっても良くってよ。

「料理人に今夜は肉と魚のどちらにしますかって訊かれたら、絶対、両方って答えるくせに」

おどおどした目で私を見上げてくるところなんて、怯えた仔ウサギみたい。そういえば、仔ウサギの肉も美味だわね。何時間もとろけるまで煮込んで、甘い果実のソースを添えて。

「あ、朝ご飯は？　お、お腹がすいたって言ってたよね？」

「ええ。今からいただくわ」

「ファイブ、ちょっと待っ……」

「イヤよ。待てないわ。わかるでしょ？」

まだ何か言いたそうにしていたけど、ディトの意見はすべて却下。今の私は聞く耳なんて持ちませんもの。ああ、たまらないわ。私の可愛い使徒。可愛い可愛い仔ウサギちゃん。今日はどこから食べようかしら？

「なんで、朝っぱらからこうなるかなあ？」

「そうね。きっとディトが眠たい顔をしていたからよ」

「言ってることと、やってることが全然逆なんだけど？」

「だって、私の大きな胸で眠るのが大好きでしょう」

聞こえてくる吐息も、とっても可愛らしいわ。吐息よね？　ため息じゃなくて。

これだけ、いろいろなことを試しているんですもの。不満を言うなんて許さなくてよ。

私、自分が愉しむためにも、相手を愉しませるためにも、努力と工夫は惜しみませんもの。

「春が待ち遠しいわ。そしたら、また美味しいモノ探しの旅に出かけられるのに」
「ゲテモノ探しの旅、の間違いじゃない？」
「あら。トウお姉様にかかれば、どんなゲテモノでも特別なご馳走に早変わりよ」
「ゲテモノのほうは否定しないんだ？」
「だって、それは事実だもの。でも、ゴブリンの脳ミソで美味しいパテを作るなんて、トウお姉様にしかできないことよ。シビレトカゲの煮凝りとか、六ツ目ナマズのオイル漬けとか、余所では絶対に食べられないし」
「まあ、珍味ではあるかな」
「でしょう？」
「命がけで味わう料理って、そうそうあるもんじゃないしね。僕は遠慮したいけど」
もうディトったら、なんて生意気な表情をするの。魅力的すぎてよ、それ。肩をすくめる仕種も。いけない子ね。私をこんな気持ちにさせるなんて。
「えーと、ファイブ？」
その戸惑った顔も好き。困った顔も好き。もっと戸惑わせて、もっと困らせてみたくなってしまうわ。
「何か、物騒なこと考えたりしてないよね？」
「物騒なことなんて、考えてなくってよ」

「まあ、褒めてくれてありがとう」
「……褒めてないけど」
「いい子ね。ご褒美をあげましょう。どこに欲しい？」
「それってご褒美じゃなくて、おしおきだと思うけど」
「あら？　ディトはそっちのほうが好きなの？」
知らなかったわ。人の好みはいろいろですものね。それで、今までつまらなそうにしていることが多かったんだわ。早く教えてくれたら良かったのに。私、努力と工夫は惜しみませんけど、無駄な回り道は避けるのが賢明というものでしょう？
それでなくても、この世界は私が欲しいモノばかりなのですもの。時間がいくらあっても足りないわ。キレイな服に、おいしい食べ物。何度でも着替えて、もっともっと味わって。眠る時間も惜しいくらいよ。
「なんで、ファイブはそこまで強欲かなあ？」
「強欲？　私が？」
それは少し違うと思うの。私が何かを欲しいと思うのは、自分のチカラを実感したいからなんじゃないかしら。
だって、何かを手に入れる瞬間って、一瞬でイッちゃいそうなくらい幸せなんですもの。優越感だとか万能感だとか、そんなのが全部いっぺんに身体の中からあふれ出してく

物足りない、なんて不満を言う前に、まずは自分にできることをしなければね。本で調べたり、人に話を聞いたり、もちろん、お相手をいろいろ変えてみるのも一法ですわね。自分に原因があるのではなくて、ひょっとしたら相性の問題かもしれないでしょう？
幸いなことに、お相手には不自由しませんもの。男でも、女でも、もうよりどりみどり。一晩に何人でも。
ええ、あんなことして、こんなことも。
もっとも、相性って難しいものですわね。これと思えるお相手には、なかなか巡り会えなくて。でも、私、あきらめなくてよ。本当はこんなものではなくて、もっとずっとイイはずですものね。
そう、もっとずっとイイことを覚えたら、ディトにも教えてあげましょう。だって、ディトは私の使徒ですもの。
「あ。ダメよ、まだ……！」
いけない。私ったら、つい気を散らしてしまって。ごめんなさいね、ディト。あら、ため息なんてつかなくていいのに。私はちっとも気にしてなくてよ。
「可愛い可愛いディト。そんな顔はしないでちょうだい」
やり直せばいいだけですもの。何回だって。ねえ、そうでしょ？
「ファイブの物欲と食欲は人の三倍だけど、性欲は三十倍くらいあるんじゃない？」

消えちゃったわ。何かが浮かびかけてたのに。
「めずらしいね。ファイブがベッドの中でぼんやりしてるとかさ」
「失礼ね。私だって、考えごとのひとつくらいしましてよ」
「怒った？」
「いいえ」
頭の中から追い払ってもらえて、良かったのかもしれないわ。ほんの一瞬だけ、浮かび上がりかけて、消えてしまった……面影。
覚えているはずありませんものね。お父様は私が生まれてすぐに亡くなってしまったから。無理に思い出そうとするのは、ハッキリ言って時間の無駄。
だから、考えごとはもうおしまい。手に入らないモノのことなんて、どうでもいいの。自分のお気に入りのことだけ考えていたいから。サファイアのブローチ、エメラルドと金細工のネックレス、リボンのドレスに刺繍のドレス。レースのローブにショールに付け襟。
「それじゃ、続きをしましょうか」
そして、私の可愛いしもべ。
「ええっ!?　また!?」
「嘘よ」
お腹がすいたわ。今度こそ、朝食にしましょう。こんがり焼いたパンに半熟の落とし卵

る感じで。ああ、私には欲しいモノを手に入れるチカラがあるんだわって。
もしも、私にそのチカラがなかったら、何かを欲しいなんて思わなかったでしょうね。
手に入らないのに欲しいと願うなんて、無駄なことで……寂しいことですもの。
ええ、どんなに願っても決して手に入らないモノを求めるなんて。
そうよ。でも……。
私にもそれがあるとしたら？　どうしても手に入らないモノが。想像もつかないけど、
ひとつくらいあるかもしれないわ。
胸に手を当てて、じっと考えてみると、なんだかそんな気もしてきますのよ。自分では
気づいていない、小さな小さな何か。欲しいことすらわからないほど、ささやかなモノ。
いったい、それは何かしら？
食べ物ではないわ。宝石とかドレスとかでもないでしょうね。どれも、その気になれば
手に入りますもの。
じゃあ、人かしら？　下僕や侍女はいくらでもいるわ。私のために命を投げ出して戦う
兵士たちもいる。男？　それこそいくらでも。私の誘いを断る男なんて、世界中探したっ
ていませんもの。そうね、実の父親でもない限り。父親？　お父様……？
「ファイブ、どうかした？」
「あ……」

IV フォウ
家族の肖像

を乗せて、薫製のお魚に、酢漬けのお野菜に。蜜に浸した干し果物も。そうそう、その前に今日着る服を選んで。そういえば、袖に垂れ布を付けたドレスもあったわ。真っ赤な毛織りのドレスも。

ああ、なんて幸せなんでしょう！　ええ、私は幸せよ。欲しいモノと、ものすごく欲しいモノ。……それ以外のことを考えさえしなければ。

そうよね？　私、何か間違っていて？

の毛が散らばっているのに気づいた。
「もう。スリイ姉様まで」
これは、スリイ姉様の悪い癖。どこにでも座り込んで、髪を切り散らかすっていうのは。髪の伸びが普通より早いっていうのもあるかもしれないけど、実のところは面白がってやってるような気がする。
だって、邪魔になると思うなら、肩の上あたりでバッサリ切ればいいのに、スリイ姉様がハサミを入れるのはもっと下のほう。髪を無造作に掴(つか)んでは、チョキチョキやっている。たぶん、ハサミで髪を切るのが楽しいんだと思う。もうほとんど趣味の領域というか。変わった趣味だと思うけど。
それに限らず、スリイ姉様は少し変わっている。少し、どころじゃないかも。かなり、変わってる。もっとはっきり言ってしまうと、変人の部類に属している。
なんてことを考えていたら、背後から、チャリチャリとハサミを鳴らす音が近づいてきた。本人登場、だ。
「スリイ姉様、髪の毛を散ら……」
散らかすのはやめてねと言いかけたまま、私の言葉は宙に浮いた。スリイ姉様は髪を切りながら歩いていた。チャリ、とハサミが鳴ると、絹糸のような髪がはらりと舞い落ちる。
「……何か用?」

「ファイブ！　ファイブでしょ！　こんなところに服を脱ぎっぱなしにしたのは！」
片づけなさい、と私は叫んだ。いくらここが人の住んでいない空き家だからといって、好き勝手に使うわけにはいかないのに。私達は、旅の途中に宿を借りているだけ。出て行くときには、きちんと元通りにしておかなければならないと思うの。散らかすなんて論外よ。
なのに、ファイブは自分の部屋みたいに服を脱ぎ捨てるわ、食べ物をこぼすわ……。片づけるほうの身にもなって欲しい。まあ、末っ子なんてどこもそんなものだろうけど。
服を畳もうとして、私は顔をしかめた。袖から脇にかけて大きな綻びができている。なるほどね。それで他の服に着替えたはいいけど、脱いだ服のことなんて忘れてしまった、というわけか。
「ファイブったら……。困った子ね」
私は大きくため息をついた。片づけだけじゃなくて、繕い物まで私がやることになるんだから。まあ、不器用なファイブに針仕事をさせたりしたら、ぼろ布を増やすことになりかねないけど。でなかったら、指に針が刺さったとか泣きわめいて大騒ぎをするか。後の面倒を思えば、私がやったほうが早いのよね。まあ、この程度の綻びくらい、ものの数分で終わるからいいけど。
他にも破れているところはないか、点検するために服を広げようとして、今度は床に髪

に寝入ってしまった。寝たふりではなくて、本当に眠ってしまうのがすごいというか。
私は枕が替わるとなかなか寝つけなかったりするんだけど、スリイ姉様は枕どころか、寝床が替わっても、寝床がなくても、それこそ地べたであっても、横になりさえすれば眠れるみたい。周りで大騒ぎをしても、関係なし。服が汚れても、全然気にしない。繊細そうに見えるけど、実は意外と神経が太いのよね、スリイ姉様は。
もったいないわ。スリイ姉様は私達姉妹の中で、一番きれいな顔をしているのに。見た目は可憐な美少女でありながら、図太くて大雑把で変わり者。こんなこと、よその人に言っても絶対信じてくれないでしょうね。
もったいないといえば、スリイ姉様の髪だってそうよ。まっすぐでツヤツヤしていて、手触りなんて絹糸みたいで。なのに、こんな不格好に切ってしまうなんて。
私がスリイ姉様みたいな髪だったら、もっとちゃんと切り揃えるとか、形良く結うとかするのに。
髪だけじゃなくて、スリイ姉様みたいな美少女だったら。だらしなく座り込んだり、寝っ転がったりなんて、絶対にしない。言葉遣いにも振る舞いにも気をつける。だって、せっかく美少女に生まれついたのに、髪型や言動で損をするなんて、考えられないわ。
スリイ姉様って、持って生まれた美質を考え無しにムダづかいしているのよね。頭だって悪くないのに、それを生かそうという気持ちは欠片もないみたいだし。

切り落とされた髪が床に散らばった。ここまで堂々とやられると、かえって言葉に詰まる。ファイブにだったら、「散らかすのはやめなさい！」と叱り飛ばしてやれるのに。
「スリイ姉様。歩きながら髪を切るのは、止めたほうがいいと思うの」
「……なぜ？」
「なぜって……。ハサミだって刃物でしょう？　手許が狂ったら危ないし」
「……平気」
危なくなんかない、と言わんばかりにスリイ姉様はまた一束、髪を切り落とした。言うだけ無駄だった、と肩が落ちるのを感じた。スリイ姉様がこういう人だってことくらい、最初からわかってたけれども。
「危なくないのはわかったから、散らかした髪の毛は片づけてくださいね。この家は私達の家じゃないんだし」
空き家に大量の髪の毛が散らばっているなんて、次に足を踏み入れた人がどう思うことか。きっと薄気味悪いと思うの。
「はい、これ」
箒（ほうき）を差し出してみたものの、これも無駄だろうな、と思った。
「……疲れた」
案の定、スリイ姉様はその場にべたりと座り込み、ころりと寝ころんで、あっという間

考えてしまうのよね。
　それに……。
「フォウお姉様？　お呼びになりまして？」
　ほら。これよ、これ。この要領の良さが私には足りないのよ。繕いものが終わる頃を見計らって現れるなんて、そんな図々しい真似、私には絶対できないわ。
「服を脱ぎっぱなしにしてはダメでしょう！　何度言ったらわかるの？　それに、こんな大きな綻びまでこしらえて！」
「あら。それ、私じゃありませんわ」
「言い訳しないの。今回は私が繕っておいたけど、次は自分でやりなさいよね」
「でも、本当に私じゃありませんもの」
　人のせいにするなんて。こんなだらしないことをするのは、ファイブくらいしかいないじゃないの。
「フォウちゃん、ごめーん。それ、わたし」
　えへへ、と男の子みたいに頭をかきながら現れたのはトウ姉様。ちょっとくらい乱暴な言葉づかいや振る舞いを見せても、トウ姉様だと逆に可愛らしく見えるのが不思議でたまらない。私だったら可愛く見えるどころか、本当に男の子だと誤解されそうだし、ファイブが同じことをすれば頭のネジが外れてるみたいに見えそうだし。トウ姉様ばっかり可愛

もしかしたら、変人って呼ばれる人達なんて、みんなそんなものなのかもしれないけど。真っ当に暮らして、普通に恋愛をして人並みの幸せを手に入れるとか、最初から考えていないのよね、きっと。

寝入ってしまったスリイ姉様が風邪を引かないように上着をかけてやって、床に散らばった髪を片づけて。それから、ファイブの服を繕って。なんだか、私だけが割を食ってる気がするわ。

スリイ姉様は変人だからあきらめるとしても、ファイブのほうはどうにかしないと。末っ子っていうだけで甘え放題、わがまま放題にさせるのは、本人のためにならないと思うの。今日という今日は、ビシッと言ってやらなきゃ。

それにしても、不公平だわ。ファイブが生まれるまでの間、私も末っ子だったことがあるはずなんだけど、全然覚えてないんだもの。物心ついたときにはもうファイブがいて、私は「下から二番目」で、「フォウお姉様」だった。

いつもいつも大人達から「お姉ちゃんなんだから我慢しなさい」とか言われて、割り切れない思いを味わったものよ。だって、私はファイブみたいにワガママを言ったり、誰かを困らせたりしたことなんて一度もないんだから。

もっとも、私は性格的に末っ子には向いてないと思うの。ファイブみたいに好き勝手なことをするには、常識と良識が邪魔をするというか。つい相手の負担とか迷惑とかを先に

「ファイブちゃんがいらないっていうから、わたしがもらったんだよね」
妹の下品な振る舞いなんて全く気に留めずに、トウ姉様はにこにこ笑いながら説明を始める。トウ姉様も少しくらいファイブをたしなめてくれたらいいのに。それって、姉としての義務だと思うの。
「でね、さっそく着てみたんだけど、うっかり力を入れすぎちゃって。こう……バリッと」
「綻びをこしらえてしまった、と」
「そゆこと。フォウちゃん、大正解！」
トウ姉様は腕力が強すぎて、しょっちゅう物を壊したり、壁に穴をあけたりしては「どうしよう」って青くなっている。姉妹の中で一番優しい人が、一番の壊し屋だなんてね。おまけに、外見はこんなに女の子らしいのに。皮肉なものだわ。
「もらったばっかりの服を破いちゃうとか、あんまりじゃない？　なんとかできないかなーと思って、針と糸を探しに行ってたんだけど……」
「はい、トウ姉様。どうぞ」
私は繕い終えたばかりの服を差し出した。ファイブと違って、トウ姉様はちゃんと自分のことは自分でやる人だけど、少しばかり要領が悪いのよね。手先はそこそこ器用なんだけど、手順が悪いというか。だから、私が先に片づけてしまうこともよくある話。トウ姉様は自分の仕事を人に押しつけようなんて思ってないから、別に腹も立たないけど。

く見えるとか、今ひとつ納得いかない。
まあ、それはさておき。
「でも、トウ姉様。これって、ファイブの服でしょう？」
名前が書いてあるわけじゃないけど、どれが誰の服かはだいたい覚えているもの。散らかしたものを片づけたり、自分のじゃない服まで繕ったり、そんなことをやっているうちにどれが誰の持ち物なのか、簡単に見分けがつくようになってしまったから。
だから、この服がファイブのものなのは明らか。問題は、トウ姉様がウソをつくとは思えないってこと……。
「うん。元はファイブちゃんのだよ」
ああ、なるほど、そういうことだったのね。やっぱり、トウ姉様はウソなんてつかない。「元は」というのは、ファイブの服をトウ姉様が譲り受けたってこと。納得。もうその先は聞かなくてもいいわ。わかったから。余計な説明はいらないから！
なのに……。
「その服、胸がきつくてもう着られなくなってしまいましたのよ」
得意そうに胸を突き出して説明するファイブに、ちょっとイラッとする。子供のくせに胸の大きさを自慢するなんて、悪趣味にも程があるっていうか。少しは恥ずかしいと思って欲しいものだわ。だいたい、乳がデカい女は頭が悪いって言うじゃない？

「フォウちゃん、だーいすきー　さっそく着てみるね」
きゃあきゃあ言いながら服を着替えたかと思うと、今度は「わーい。ぴったりだー！」とか、その場でくるくる回ってみたり。なんだか、トウ姉様が妹で、私のほうが姉のように思えてくる。
「ねえねえ。似合う？　似合う？」
私とファイブが少々引き気味にうなずくと、トウ姉様は満面の笑みを浮かべて回れ右をした。
「ワンねえちゃんにも見せてくる！」
ドアを閉めるのも忘れて飛び出していくなんて、まるで子供みたい。って、子供だけど。罪もない人々を苦しめている悪者や魔物を倒す、なんてことをしながら旅をしているせいで、時々、自分達がまだ子供だってことを忘れそうになってしまう。やたら胸の大きさを自慢したり、下品なことばかり口にしたりする妹のせいもあるけど。
「ねえ、フォウお姉様」
その下品極まりない妹が背後からすり寄ってくる。イヤな予感がした。
「私、ウソなんてついてませんでしたわよね？」
「そうね。私の誤解だったみたいね」
「なのに、フォウお姉様ったら、私を犯人扱いして。ひどいわ。私、とっても傷つきまし

「えっ？　なになに？　うそっ！　これ、フォウちゃんがやってくれたの!?　すごーい！はやーい！　うまーい！」
トウ姉様は上辺だけのお世辞だとか、口先だけの褒め言葉は決して言わない。これは心の底からの賛辞。そう、トウ姉様は本当に心がまっすぐな人だから。明るくて、素直で、優しくて、思いやりがあって。
ただ、あまりにもまっすぐすぎて、妹としては心配だったりする。素直さや優しさって、裏を返せば、だまされやすかったり、利用されやすかったりするってことでしょう？
それでなくても、女の子らしくて可愛らしいトウ姉様だもの。良からぬ目的で近づいてくる輩がいても不思議じゃない。頼りなさそうでフワフワした雰囲気は、簡単にだませそうに見えるだろうし、実際、簡単にだまされると思う。
でも、トウ姉様だったら、多少痛い目に遭っても、「次は大丈夫」って根拠もなく考えていそう。「今度こそ運命の相手」とか言いながら、毎回毎回男に利用されて捨てられそうっていうか。そこもまた、心配なのよね。
だって、こんなに可愛く生まれついたのに、ろくでもない男に引っ掛かって人生を棒に振るなんて、あんまりだと思わない？　これだけ恵まれた容姿で負け組とか、悲劇としか言いようがないもの。そんなことになったらと思うと、心配でたまらないわ。ええ、私、心配してるのよ？

「うるせえ！　牛女！　草でも食ってろ！」

その場にあったものを手当たり次第、投げつける。それを「いやぁん」とか何とか身体をくねらせて、うまいこと避ける様子がまたムカつく。

嫌い！　嫌い！　みんな嫌い！　大嫌い！

どうせ私はトウ姉様みたいに可愛くないし、スリイ姉様みたいな美少女でもないし、ファイブと違って、ぺったんこだし！

大っ嫌い！　私、自分の顔が嫌い！　自分のカラダが嫌い！　きれいでもなければ、可愛くもなくて、平凡そのもののつまらない顔。手足なんてひょろひょろしてて棒きれみたいで、髪は中途半端に癖があって。

死ぬほど嫌いなのが、みっともない爪。放っておけば、どんどん伸びるし、先がひん曲がるし、割れるし、あっちこっちに引っかかるし。こんな爪、いらない。全部剥がして捨ててしまいたい。この手も、足も、顔も、何もかもいらない！

私なんか……いらない。

私？　いらないのは私？　違う！　いらないのは、私じゃない！

オマエだよ！　役立たずの下ネタ女！　肉の塊ぶら下げて、いい気になってんじゃねーよ！　オマエなんかクソの役にも立たねーんだよ！　いらねーよ！　死ねよ！

かわいこぶってる怪力女も死ね！　頭のイカレたハサミ女も死ね！　ちょっと顔がいい

たのよ？」
まるっきり傷ついてない口調で言って、ファイブが私の背中にぴたりと貼りついた。
「……悪かったと思う」
「それだけですの？　ごめんなさい、は？」
「……ごめんなさい」
「あらぁ？　よく聞こえなくてよ？」
「ご・め・ん・な・さ・い！」
何よ、私をやり込めることなんて滅多にないもんだから、いい気になって。ムカつく！
「離れてくれない？　背中に胸が当たってるんだけど？」
そのムダにデカい乳も、もんのすごーくムカつく！
「はぅん。当たっているだけじゃご不満？　直接お触りになる？　ぺったんこのフォウお姉様には、こーんなコトできないでしょ？　こーんなふうに、むぎゅうって」
「ぺったんこで悪かったわねっ！　誰が触るもんですかっ！　暑苦しいからあっち行けって言ってるのっ！　それから、その『はぅん』っていうの、やめてよねっ！　子供のくせに淫売みたいで下品でしょっ！　だいたいね、栄養が全部胸に行ってるから、あんたは牛並みに頭が悪いのよっ！　おバカなのよっ！　ばーかばーかばーか！」
「きゃ。フォウお姉様、こわーい」



からって、スカしてんじゃねーよ！　たかが顔の皮一枚で、何様のつもりだよ？　そのキレイなキレイな顔の皮、ひん剥いてやろうか？　ズルッズルに剥いて、ズッタズタに切り刻んで、グッチャグチャに踏みつぶして。

あっははははは！　ああ、楽しい。ああ、楽しい。ああ、楽しい……。

気がついたら、部屋の中はめちゃくちゃ。なのに、スリイ姉様はぐっすり寝入ったまま。この騒ぎの中で熟睡していられるなんて、もしかしたら、スリイ姉様ってすごい人かもしれないわ。変人だけど。

ファイブはとっくの昔に逃げ出したみたい。あの子、要領だけはいいから。頭は悪いけど。

「あーあ。私ったらバカみたい」

早く片づけなきゃ。散らかしたら自分で片づける。当たり前のことよね。その当たり前のことができない姉や妹を見ていると、真っ当でいることが馬鹿馬鹿しく思えてくるけれども。

ひっくり返った椅子やテーブルを元に戻して、水差しを拾って、床を拭いて。いやだ、私ったらお皿まで投げちゃってる。ファイブが食べ残したまま置きっぱなしにしていたらしくて、割れた破片には食べ滓がこびりついてて。

トウ姉様みたいに可愛いわけじゃないし、スリイ姉様みたいに美少女でもないけど、表情や仕種のひとつひとつに知性がにじみ出ている感じ。
だから、私が目指すべきなのは、ワン姉様だと思うの。顔かたちは今さら変えられないけど、知性を磨くことは可能だもの。
それにワン姉様も、ぺったんこだしね。今のところ。
「ワン姉様、何をお手伝いすればいいの？」
後をついて歩きながら、私はワン姉様に尋ねてみる。
「荷車の修理よ。近くの農家でもらってきたの」
「修理？　荷車？　何に使うの？」
「次の目的地では、運ぶものがあるから」
ワン姉様の横顔に強い決意が見えた。これは、戦いに赴く前の表情。それも自分達のためじゃない。誰かのため、苦しんでいる人々のための戦い。ワン姉様は決して不正を許さない人だから。
でも、時々、気の毒に思うことがあるの。一人で責任や義務を背負い込んでいるワン姉様を見ていると。
だって、ワン姉様は長女じゃないんだもの。今の立場は、予想外の繰り上げみたいなものので。本当だったらワン姉様も「妹」でいられた。一番上の姉としての責務を負って、私

「なんで私が……」
もうため息しか出てこない。でも、お皿を片づけなかったのはファイブだけど、それを投げて割ったのは私なんだから、仕方がない。
これからは、癇癪を起こすのは控えよう。ムカつくことがあっても、我慢しよう。どうせ、何を言っても何をやっても、損をするのは私なんだもの。
やっと片づけが終わって、私は椅子に腰を下ろした。スリイ姉様じゃないけど、疲れた。ほんとに疲れた。
「誰かいない？」
テーブルにうつ伏せていた私は顔を上げる。入ってきたのは、ワン姉様だった。
「ワン姉様、どうしたの？」
「ちょうどよかった。フォウ、手伝って」
「スリイ姉様も起こしましょうか？」
ワン姉様は床で眠りこけているスリイ姉様をちらりと見ると、首を横に振った。
「スリイはいいわ。フォウがいれば大丈夫」
フォウがいれば。その言葉を私は心の中で繰り返す。うれしい。ワン姉様は私のことを認めてくれている……。
姉妹の中で一番賢くて、物知りで、しっかり者のワン姉様。責任感も正義感も強い人。

どうせなら、もっと昔の夢を見たかったな、と思う。もっとずっと遠い昔、誰よりも強くて誰よりも美しいゼロ姉様が大好きで、ゼロ姉様に憧れて、ゼロ姉様の真似ばかりしていた。あの頃の夢。

うぅん。今も私はゼロ姉様が好き。私達は姉妹で、家族なんだもの。いつか、昔みたいに優しいゼロ姉様に戻ってくれて、また一緒に暮らせるって信じてる。必ずまた幸せに暮らせるって。

たとえそのとき、私以外の誰かがいなくなっていたとしても。

達を仕切るのは、ワン姉様じゃなくて別の人だった……。
「あの……。あのね、私、精一杯、ワン姉様のお手伝いをするから。何もかも一人で背負い込まないでね」
ワン姉様は少し驚いたようだったけれど、目許を和ませて「ありがとう」と答えてくれた。
トゥ姉様は頼りないし、スリイ姉様は変人だし、ファイブは自分勝手だし。だから、私がワン姉様の力にならないと。いくらしっかり者でも、もともと長女じゃないワン姉様には、きっと荷が重いはずだものね。
大丈夫よ、私が手助けしてあげるから。そんなの、妹として当然のことよ。ええ、他の姉妹はともかくとして。そうでしょ、ワン姉様……。

「あれ？」
気がついたら、ワン姉様はいなくて。修理が必要な荷車も、宿代わりに使っていた空き家もなくて。私はいつものベッドの中だった。
「なんだ、夢だったのね……」
そんなの当たり前。だって、私達はもう子供じゃないし、旅もしていない。何もかも、変わってしまった。五人で旅をしていた頃は、まだ引き返せるかと思っていたけど……。

III スリイ

ワタシの人形は良い人形

×月×日

白の兵隊さんをつくり終わりました。これで、兵隊さんはおしまいなので、明日からはほかのお人形をつくります。

ワタシが見た「チェスばん」には馬のお人形ものせてあったけど、馬はつくらないつもりです。ワタシは動物よりも、ヒトの形をしたお人形のほうが好きだからです。

おうちのお人形もあったけど、つまらないからつくりません。それに、おうちのお人形って、お人形じゃないよね？　おうちは動いたり、しゃべったりしないもの。

だったら、馬とおうちのかわりにどんなお人形をつくればいいのかな？　王さまと女王さまはもういるし。「そうじょう」みたいに変わった服のお人形にしようかな？

けど、「そうじょう」ってなんだろう？　今度、しらべてみようと思います。

×月×日

「そうじょう」のこと、しらべてみたら、わかりました。「おぼうさま」というえらいヒトのことなんだそうです。それで、変わった服とぼうしだったのです。

本には、「そうじょう」は、頭のてっぺんをそっていて、髪の毛がないと書いてありました。

ワタシはそれを知らなかったので、「そうじょう」のお人形のぼうしの下は、ふつうの頭にしてしまいました。

×月×日

今日、はじめて自分でお人形をつくりました。つくり方はヒトのまねだけど、ワタシがつくったワタシだけのお人形です。思ってたより、ずっとじょうずにできたので、ワタシはとってもうれしくなりました。

×月×日

ワタシがつくり方をまねした兵隊さんのお人形は、「チェス」という遊びに使うモノなんだそうです。領主の城から持ち出した兵隊さんは、ワタシがはじめて自分のモノにしたお人形でした。小さいころからお人形が好きだったけど、それまで自分のお人形を持っていなかったのです。

持ち出したのがバレて、ワン姉さんにしかられたけど、ワタシはお人形を手ばなしませんでした。だって、はじめてのお人形だったんだもの。しかられても、ワタシはお人形が好きです。

×月×日

今日は、8体めのお人形をつくりました。黒の兵隊さんはこれでおしまいです。明日からは、白の兵隊さんをつくろうと思います。



さっそく、「そうじょう」のお人形の髪の毛を頭のてっぺんだけ、短くしてみました。本に書いてあるような、きれいな丸い形にするのはむずかしかったです。

でも、これでちゃんと「そうじょう」のお人形になりました。

×月×日

本を読んでいたら、上半分が人間で、下半分が馬という生き物が出てきました。馬のお人形のかわりをどうするか、ずっと考えていたんだけど、ちょうどいいので、これをつくることにしました。

もしかしたら、おうちのお人形のかわりになるものも出てくるかもしれないと思って、今日はずっとその本を読んでいました。

×月×日

馬のお人形、ちゃんとしたチェスでは「きし」なんだそうです。

なあんだ。だったら、最初から馬に乗ったヒトのお人形をつくればよかったんだ。そういえば、領主のお城で見たチェスのお人形にも、ヒトが乗ってる馬がひとつだけあったな。乗ってない馬のほうが多かったから、そっちがふつうなんだと思ってた。

どっちにしても、もうつくっちゃったから、いいや。

×月×日

今日は、今までにつくったお人形たちと遊びました。絵本の中に、お人形と遊ぶ女の子が出てきたので、ワタシも遊んでみることにしたのです。

その女の子は、父さんのお人形と母さんのお人形とおばあちゃんのお人形とおじいちゃんのお人形と子供たちのお人形で遊んでいました。でも、ワタシは父さんと母さんがあまり好きではなかったので、そのやり方で遊んでも、そんなに楽しくありませんでした。

それに、おじいちゃんとおばあちゃんもいなかったし。オクタはおじいちゃんだけど、ワタシのおじいちゃんじゃないし。

何か別の遊び方を考えてみようと思います。

×月×日

今日は、お人形たちと「ワルモノたいじごっこ」をしました。

ワン姉さんのお人形とトウ姉さんのお人形、それから、フォウとファイブのお人形も用意して、悪い領主のお人形をやっつけさせました。お人形だから、ウタノチカラはまねできなかったけど、みんなで力を合わせて戦うところは、じょうずにまねできたと思います。

とっても楽しかったけど、悪い領主のお人形はこわれてしまいました。

また新しいお人形をつくらなきゃ。遊ぶのも楽しいけど、やっぱりワタシはつくるほうが好

もしかして、「おうち」のお人形も別のものかな、と思って調べてみたら、おうちじゃなくて、お城でした。でも、やっぱりヒトじゃないし、生き物でもなくて、がっかり。
いろいろ考えて、お城のお人形は、こないだの本に出てきた一ツ目の怪物にすることにしました。見上げるくらい大きな怪物です。
両腕を後ろでしばって、両足もぐるぐるまきにすれば、建物らしく見えるよね？　ちゃんと建物に見えるように、階段とかハシゴもつけよう。

×月×日
チェスのお人形32体、全部つくり終わりました。ならべてみると、だんだんじょうずになっているのがわかります。うれしい。
次はどんなお人形をつくろうかな。

×月×日
今日は、ヒトのまねじゃない、自分で考えたつくり方でお人形をつくりました。
今までのつくり方だと、材料を集めるのが大変だったんだけど、このつくり方ならそんなこともありません。それに、チェスのお人形よりも、ずっとキレイで、ずっとステキです。
今度こそ、ワタシだけのお人形です。かわいいかわいいかわいい、ワタシのお人形。

ワタシはお人形が好きだけど、ハサミも好きです。切るときにチャリチャリ鳴る音も、さくりさくりという手ごたえも、何もかも大好きです。自分の髪を切っていると、たのしくてたのしくて、ごはんを食べるのもわすれてしまいます。

オクタの髪を切ってみたら、ワタシの髪と違って、かたくてごわごわでした。ヒゲも切りたかったんだけど、逃げられてしまいました。本当は「そうじょう」みたいにしてみたかったのに。

ワタシはハサミが好きだけど、オクタはそうじゃないみたいです。おもしろいのに。

あと、オクタはお人形も好きじゃないみたいです。

×月×日

オクタは変わった靴をはいています。おもしろい形の靴です。お人形にはかせてみたかったのに、オクタは貸してくれませんでした。

あんな靴なのに、オクタは逃げ足が速いのです。髪とヒゲを切ろうとしたときも、びっくりするくらいの速さで逃げてしまいました。他のところを切ろうとしたときなんて、もっと速かったです。

ヘンなの。なんでイヤなんだろう？　おもしろいのに。よくわからない。

そういえば、最近、オクタと遊んでいません。だって、オクタはお人形が好きじゃないから。ワタシはお人形遊びがしたいのです。

きです。

×月×日

今日は、お人形たちと「お茶会ごっこ」をしました。「ワルモノたいじごっこ」ではお人形をこわしてしまったけど、お茶を飲んでおしゃべりするだけなら、こわれないよね。

お人形とおしゃべりするのは楽しいです。お人形たちはワタシの話をじっと聞いてくれます。お人形たちは少しも文句を言いません。「それどんな意味？」とか「何言ってるのかわかんない」とかも言いません。

お利口さんにしてたごほうびに、お菓子をつくってあげました。お茶もつくりました。宝石みたいにキレイな紫色のお茶です。お菓子もおそろいにしたかったけど、どうしても同じ色にならなかったので、緑色のお菓子です。

お人形たちにお菓子を食べさせて、お茶を飲ませてあげたら、なんだか顔がキタナイ色になってしまいました。洗ってみたけど、元の色には戻りませんでした。おまけに、おかしなニオイもしてきたので、お人形たちは捨てました。

また新しいお人形をつくらなきゃ。「お茶会ごっこ」はもうやらないことにします。

×月×日

×月×日

今日は、「もっとかわいい」って何なのか、ずっと考えていました。ワタシには、どのお人形もかわいく見えます。どの子も、みんな、同じようにかわいいのです。きっとそのせいで、ワタシにはただの「かわいい」と「もっとかわいい」のちがいがわからないのかもしれません。だったら、きちんと順番をつけたら、ただの「かわいい」と「もっとかわいい」のちがいがわかるんじゃないかと思いました。

今までにつくったお人形を全部、「かわいい」順にならべてみました。そして、どこがどうちがうのか、見くらべてみました。

まず、おでこが狭い子より、広い子のほうがかわいいです。それから、頭が小さい子より大きい子のほうがかわいいです。目も小さかったり細かったりする子より、くるっとしてたり、ぱっちり大きい子のほうがかわいいです。鼻と口は小さい子のほうがかわいいです。

ほっぺたは、ぷっくりしてる子のほうがかわいいです。腕や足も、太めで短くて、ぷっくりしてる子のほうがかわいいです。おなかも、まったいらな子より、ぽこんと出っぱってる子のほうがかわいいです。

と、いうことは。

今より頭を大きくして、おでこを広くして、目をぱっちりさせて、鼻と口をちっちゃくして、ほっぺたをぷっくりさせて……。

お人形が好きじゃないオクタは、一人で遊んでればいいと思います。

×月×日

今日は、お人形をもっとかわいくできないか、ずっと考えていました。ワタシは、もっとかわいいお人形をつくりたいのです。

もっとかわいい服をきせればいいのかな？　もっとかわいい服って、どんな服？　ひらひらのかざりがついた服？　ちょうちょ結びがついた服？

でも、服でかわいくなっても、ぬがせてしまえばかわいくなくなるよね？　それって、もっとかわいいお人形とは言わないよね？

もっとかわいい髪型にすればいいのかな？　もっとかわいい髪型って、どんな髪型？　くるくるの巻き毛？　三つ編み？　おさげ髪？

でも、もっとかわいい髪型にしても、みじかく切ったり、ほどいたりしてしまえば、かわいくなくなるよね？　それって、もっとかわいいお人形とは言わないよね？

やっぱり、こういうのは、ちがう気がしました。ワタシがつくりたいのは、もっとかわいいお人形なのです。もっとかわいい服や、もっとかわいい髪型がにあうお人形じゃないのです。

でも、もっとかわいいって、なんだろう？

枕やクッションは、中身がいっぱい詰めてあるほど、ふくらんでふかふかになります。お人形のおなかにも「わた」をいっぱい詰めればいいのです。

いっぱいいっぱい「わた」を詰めたら、ぷっくり丸いおなかになりました。大成功です。

おなかをぷっくりさせることができたので、同じように腕や足にも「わた」をいっぱい詰めてみました。ぷくぷくのかわいい腕と足ができました。指もぷくぷくしてたほうがかわいいので、小さくてちょっとむずかしかったけど、一本一本に「わた」を詰めました。手のひらにも詰めました。

そうして、元の頭をつけてみたら、ちゃんと頭が大きくて、腕も足もおなかもぷっくりしているお人形ができました。

ただ、ワタシのやり方がまだじょうずではないので、太さや長さがあまりそろっていなくて、ぶかっこうです。チェスのお人形のときみたいに、何体もつくっていけば、もっとじょうずにつくれるようになるはずです。

明日もがんばってつくろうと思いました。

×月×日

頭が大きくてぷくぷくのお人形、だんだんじょうずにつくれるようになりました。もうぜんぜん、ぶかっこうじゃありません。

うん、わかった！　お人形をもっとかわいくするやり方。さっそく明日、ためしてみようと思います。

×月×日

今日は、お人形を「もっとかわいく」つくり変えてみました。でも、やってみたら、思っていたよりずっとむずかしかったです。

まず、頭を大きくするのがたいへんでした。なぜって、お人形の頭はとてもカタイのです。風船をふくらませるようなわけにはいきません。

おでこを広くしたり、鼻を小さくしたりするのも、うまくいきませんでした。だって、木みたいにけずったり、粘土みたいに丸めてつぶしたりできないからです。

しばらく、あれこれためしてみたけど、うまくいかなくて、とうとうお人形を1体、ダメにしてしまいました。でも、そこで、やっといい考えがうかびました。

頭の大きさを変えるのがむずかしいなら、身体の大きさを変えてみたらどうかな？

腕や足の長さを変えるのなら、ワタシでもできそうな気がします。やってみたら、できました。

おなかをぷっくりさせるのはむずかしいかな、と思ったんだけど、ベッドの枕を見ているうちに、またいい考えが浮かびました。

ったものだから、ワタシはクシャミが止まらなくなってしまいました。
甘くてふわふわのお菓子を切ったときには、ハサミがクリームでべたべたになってしまいました。
ワタシがクシャミをしながら、べたべたのクリームをなめているところを見て、オクタは笑っているような困っているような妙な顔をしていました。
その後、オクタがワタシの髪を洗って羽毛だらけになった服を着がえさせてくれたので、ちゃんとクシャミは止まりました。
でも、ほっぺたの中身にできるようなモノは見つかりませんでした。
赤ちゃんのほっぺたって、何でできてるんだろう……？

×月×日
いろんなモノをためしてみたけど、結局、ほっぺたの中身は毛糸をよくよくほぐして使うことにしました。これが一番、ぐあいがいいみたいです。
白い毛糸と赤い毛糸とピンクの毛糸をていねいにほぐして、やわらかくして、細い糸みたいにして、ほっぺたの内側に詰めました。ぎゅうぎゅうにしないで、ふわっとなるように。でも、すかすかにならないように。
何度も指で押してみて、やわらかさを確かめて。

つくっているうちに、「もっとかわいいお人形」の手足やおなかは、赤ちゃんににているんだと気づきました。

そういえば、赤ちゃんって頭が大きいよね。おでこも広いし。目がぱっちりしてて、鼻も口もちんまり小さくて。そうだったんだ。「もっとかわいい」って、赤ちゃんみたいに見えるってことだったんだ。うん、わかった。

じゃあ、もうちょっとほっぺたをぷにっとさせてみようかな。赤ちゃんのほっぺたって、そんな感じだよね。たぶん、「わた」よりもっとやわらかいものを詰めたほうがいいよね。何にしよう？

少し考えてみようと思います。

×月×日

今日はずっと、「ほっぺたの中身」をさがしていました。うんとやわらかくて、手ざわりがいいモノ。

羽ぶとんの中身？　クッションの中身？　ぬいぐるみの中身？　お菓子の中身？

ふっくらしてるモノ、ふわふわしてるモノ、いろんなモノをハサミで切って、中身を出して調べてみました。

羽ぶとんを切ったときには、こまかい羽毛が部屋中に散らばって、うっかり吸いこんでしま

II

トウ

きょうの料理

何日も何日もかかったけど、やっと赤ちゃんみたいなほっぺたの「もっとかわいいお人形」ができあがりました。ぷっくりしたおなかに、ぷくぷくの腕と足。かわいいかわいいワタシのお人形です。

でも、ワタシは、もっともっとかわいいお人形がつくりたいのです。

もっともっとかわいいお人形って、どんなお人形だろう？　中身は何でできてるのかな？　材料は何にすればいいのかな？

もっともっとかわいいって、なんだろう？

またじっくり考えてみようと思います。

オクタがいっしょに遊びたそうにしてるけど、ワタシはいそがしいのです。もっともっとかわいいお人形をつくったら、もっともっとかわいいお人形をつくりたくなると思うから。

次はどんなお人形をつくろうかな。もっともっとかわいくて、いっぱいいっぱい遊べるお人形がいいな。

うふっ……ウフフフフフッ。

超カッコイイ顔があって。

「心配するのも当然かと。この国の者達にとって、貴女は大切なウタヒメなのですから」

やだ、どうしよう！　ほっぺたから火ィ噴きそう！

わたし、顔が真っ赤っかになっちゃってるよね!?

「もちろん、この私以上に貴女を大切に思う者など、この世にいるはずもありませんが」

もうダメ！　心臓ばくばくしてきたっ！

どうしようどうしようどうしようどうしようどうしよう!?

「トウ？」

なんでセントってこんなにカッコイイんだろ？

カッコイイだけじゃなくて優しいし。

みんなと一緒にいるときはおもしろいコトもいっぱい言ってくれるし。

二人っきりのときは……きゃああああっ！

「トウ？　もしや、気分がすぐれないのでは？　少し寝室で横になったほうが」

寝室？

そそそそその先は言っちゃダメっ！

きゃーっ！　きゃーっ！　きゃーっ！

「ひとまず料理はやめにして……」

「何かお手伝いしましょうか、トウ様」
「あー。セントってば、またトウ様って呼んだー。二人きりのときはトウって……」
呼ぶ約束なのに、と言いかけて、やめた。
他の人がいるときはケジメだから「トウ様」って呼ぶのは仕方ないけど、二人きりのときには様づけで呼ばない。セントとわたしがそんな約束をしたのは、もうずいぶん前のこと。だから、最近ではセントも、ちゃんと「トウ」って呼んでくれるようになった。二人きりならば。
なのに今、様づけで呼んだ。と、いうことは。
大鍋に水を張る手を止めて、回れ右。調理場の入り口へ、だーっと走る。ばたばたと走り去っていく足音がした。それも複数。あわてふためいて逃げる後ろ姿はこの調理場の料理人達、だった。
「やっぱり」
みんなが覗いてるのを知ってたから、セントはわたしのことを「トウ様」なんて呼んだんだね。
「もう～！　一人で大丈夫だよって言ったのに。みんな、なんで信じてくれないかなあ？」
むくれてたら、大きな手のひらがほっぺたに触れた。ふわって。で、目の前にセントの

壁際の椅子を指さして、なるべくセントの顔を見ないようにして。だって、また心臓ばくばくしちゃうもん。

さて、と。さっきの続き。

「うおりゃっ！」

水を張った大鍋を台の上にのせる。それから、呪文を詠唱(えいしょう)して、と。

台に描かれた魔法陣が光ったかと思うと、大鍋が炎に包まれた。どういう仕組みになってるのか知らないけど、この台って、もとは何かの儀式に使ってたみたい。この部屋も、本当は調理場じゃないんだよね。

っていうか、ここって神殿だし。神殿って人が住むために造られた建物じゃないもんね。

でも、ワンねえちゃんから「砂の国を統治して、神殿を守るように」って言われたから、思い切って住んじゃうコトにしたんだ。そのほうが何かと便利じゃない？　新しく家を建てなくてもいいし。まあ、いろいろと模様替えはしなきゃならなかったけど。

古い本とか巻物とかをしまってた部屋は、中身を全部出して寝室にしたんだよね。ホコリがすごかったけど、ちゃんとお掃除して、床もピカピカにみがいたら、いい感じになったの。

壁紙は小花模様にして、同系色のキルトをベッドカバーにして。猫足テーブルをベッド

その一言で、わたしは大事なコトを思い出した。
「ダメ！　今日はお料理するの！」
落ち着け、落ち着け、わたし！
今日はわたしが作ったお料理をセントに食べてもらうんだから！
二人っきりのディナーなんだから！
二週間前から準備してきたんだから！
深呼吸、深呼吸。
「それでは、何かお手伝いを」
「それもダメ！　ていうか、見ちゃダメ！　だって、何を作ってるか、わかっちゃったらつまんないでしょ？」
あ、でもでも。
「見ちゃダメだけど、ここにいてくれたらうれしいな」
「御心のままに」
ああっ！　そのニコッて笑うのダメ！　反則！
「深呼吸深呼吸。しずまれ、わたしの心臓。もっぺん深呼吸」
息を吸って吐いて、手のひらでほっぺたをぱしぱし叩く。
「よし！　ちょっと落ち着いてきたっ！　セントはそこに座ってて！」

「もしかしなくてもトロルだよ。皮を剥がしたヤツ。ぶつ切りにして、香草で煮込むの。あ、ちゃんと血抜きしてあるから大丈夫だから……っと。どおりゃあっ！」

関節を狙って剣を振り下ろす。トロルの骨って硬いから、普通の包丁だと刃こぼれしちゃう。でも、硬いのは骨だけで、肉はけっこう柔らかいんだよね。

だから、煮込みだけじゃなくて、いろんなお料理に使えるの。焼いてもいいし、薄く切って茹でてもいいし、衣を付けて揚げてもいいし。塩漬けにして樽に入れておけば半年くらい保つから、とっても便利！

ただ、トロルは大きくて重たいから、腕力のない人には扱いにくいんだよね。食材として知られていないのは、きっとそのせいだと思う。毛皮が再利用できれば、また違ったんだろうけど。トロルの毛皮って臭くて使い物にならないからなー。

「セントとわたしだけで丸ごと一体はちょっと多いかなぁ……っと！　でえぇぇぇいっ！」

ぶつ切りにした後は、硬い筋を取って、お塩とお酒をもみ込んで。筋を取るのがちょっとだけ手間。でも、その手間も楽しい。わたし、お料理って大好き。

「好きなときにお料理できる場所があるっていいなぁ」

みんなで旅をしていた頃は、お料理できる場所に泊まれるなんて、あんまりなくて。たき火でお肉やお魚を焼くだけ、みたいなのばっかりだった。

サイドに置いて、花瓶を飾って。カワイイ部屋って、あこがれてたんだよねー。
ホントはかわいいカーテンも欲しかったんだけど、この神殿って地下にあるから窓がないんだよね。でも、その代わり、すっごく過ごしやすいの。外が暑いときは涼しくて、外が寒いときは暖かくて。砂の国は厳しい気候だから、こういう建て方にしたんじゃないかな。昼間でも明かりをつけなきゃいけないのは面倒だけどね。
食材が傷みにくいっていうのも、地下のいいところ。この儀式の部屋は調理場にしてるんだけど、食料保管庫とかわざわざ作らなくてもいいし。火から遠い場所に置くようにするくらいの配慮は必要だけど。
でね、ド真ん中にある広～い場所は、椅子とテーブルをいっぱい置いて大食堂にしちゃった。護衛の兵隊さん達とか、近所の人達とか、みんなでいっしょにご飯が食べたかったから。大勢で食べるご飯って、おいしいでしょ？
でも、たまにはセントと二人っきりもいいなーって思ったから、今日はわたしがお料理することにしたんだ。いつもお料理を作ってくれたり、お給仕してくれたりする人達は休暇ってことにして。みんなだって、たまにはお休み取ってゆっくりしたいもんね。
「よっこらしょっと」
野菜はもう洗ってあるから、お湯が沸く間にお肉の下ごしらえをしなきゃ。
「トウ、それはもしかしてトロル……」

「スリイ様は？　刃物の扱いには長けておいでのようですが？」
「刃物って言っても、スリイちゃんはハサミ専門だからねー」
調理用のハサミがないわけじゃないけど、スリイちゃんのハサミはちょっと料理向きじゃないんだよね。いつだったか、釣った魚をハサミでさばいて、ぐちゃぐちゃにしちゃったことがあったし。
でも、ワンねえちゃんがぐちゃぐちゃになった魚をていねいに石で叩いてすりつぶして、平べったくして焼いたら、すごくおいしかったっけ。料理に失敗なんてないのよってワンねえちゃん、言ってたなあ。
「それに、スリイちゃんはあれこれ手を加えるのは好きじゃないみたい。素材を楽しみたいタイプっていうか。新鮮なものはそのままが一番、みたいな」
「要するに、手抜きなわけですね？」
「んー。そうとも言うね」
スリイちゃんが炊事当番のときは、お野菜とか丸かじりだったもんね。スリイちゃんって、食べるコトには興味がないみたいだし。
「あ、でも、お野菜は火を通しすぎないほうが栄養が逃げないのよって、フォウちゃんも言ってたよ」
土の上にできる農作物は生のまま、土の下にできる農作物はしっかり火を通す、だった

たまーに、お台所のついた空き家とかがあると、すっごいうれしかったな。そういうときは、当番を代わってもらって、わたしがご飯作ったりね。

「そういえば、姉妹の中で一番お料理上手なのは、どなたですか？」

「一番上手っていったら、もちろんワンねえちゃんだよ」

「トウではなく？」

「うん」

姉妹の中で一番料理が好きなのはわたしだと思うけど、上手なのはワンねえちゃん。もうこれはゼッタイ！　ワンねえちゃんはお料理の天才だもん！

「でもね、ワンねえちゃんって、料理が下手っていうことが理解できないんだって」

「というと？」

「料理の基本なんて子供にでもできるような単純なものばかりなのに、それができないなんて信じられないって言ってた」

「ワン様にとって料理はできて当然、というわけですね。とはいえ、料理は基本ばかりでもないでしょうに」

「少し頭を使えば、応用なんていくらでもできるはずって」

ただ、ワンねえちゃんにとっての「少し頭を使う」は、他の人にとっては「ウンウンうなるほど頭を使う」だったりするんだけど。

理はどれも食べられたって。
「それでは、ファイブ様はいかがでした？」
「フォウちゃんと正反対だったなー、ファイブちゃんのお料理は。健康なヒト限定、みたいな。食べるのにちょっと気合いが要るっていうか」
ファイブちゃん、香辛料をめいっぱい効かせたお肉とか、脂っこいものとか大好きだったし、お砂糖もお塩もたっぷり使ってたし。いっつもフォウちゃんに「野菜少なすぎ！」「味濃すぎ！」とか言われてたもんね。
食材も変わったものが大好きで。その辺に生えてる草とかキノコとか、どんどん入れちゃうし、ちょっと見た目がアレなモノでもドンと来いって感じ。ファイブちゃんのおかげで、食材の幅が広がったって気がする。わたし、虫が食べられるなんて知らなかったもの。
ただ、ファイブちゃんって、身体に悪いとか危ないとか、そういうの全っ然、気にしないんだよね。いつだったか、ファイブちゃんの作ったお魚とキノコのシチューを食べて、みんなひどい目にあったコトがあったっけ。
ワンねえちゃんの話だと、毒がある魚を丸ごと使っちゃってたみたい。それと、きれいな色のキノコは食べちゃダメなんだって。その両方がたっぷり入ってたんだもん。そりゃあ、お腹も壊すよね。
でも、ファイブちゃんはぜんぜんメゲてなくて。次の炊事当番のときも、白い斑点のあ

かな。だから、果物や菜っぱは火を通さないで食べたほうがいいし、玉ねぎやお芋は煮たり焼いたりしたほうがいいんだって。
「それから、お肉と野菜は一対二の割合で食べるとか、果物は夜より朝に食べたほうがいいとか、週に二回以上、お魚を食べたほうがいいとか」
他にも、お砂糖やお塩の取りすぎはダメって言ってたっけ。だから、フォウちゃんが炊事当番のときはかなり薄味だったんだよね。ファイブちゃんなんて、味を見る前からお塩をドバーッと振りかけてたもの。「フォウお姉様のお料理にはこれくらいがちょうどよろしくてよ」とか言って。
「フォウちゃんのお料理は、すっごい健康になれそうっていうか。そう、お薬のご飯って感じかな」
「要するに、味も素っ気もない、と」
「んー。そうとも言うね」
でも、フォウちゃんのお料理は病気のときにはピッタリだったんだよね。お腹を壊してるときでも、ちゃんと食べられたし。
ずっと前に農家に泊めてもらったことがあったんだけど、お礼にフォウちゃんが晩ご飯を作ったんだよね。そしたら、その家のおばあちゃんがすっごい喜んでくれて。年を取って身体が弱ってから食べられないものばかりになってしまったけど、フォウちゃんのお料

「ファイブちゃんって、常に高みを目指すタイプなんだよね。食の冒険者っていうか、食の挑戦者っていうか。ううん、食の伝道者？　食の教祖様？　ええと、なんだろ？」

「要するに、ゲテモノ喰いなのでは？」

「んー。そうとも言うね」

でも、この砂の国では、そのゲテモノ喰いが大切な「生活の知恵」だったりする。何日も雨が降らないなんてことが全然めずらしくなくて、飢饉(ききん)じゃない年のほうが少ないっていう国だから。

その辺の魔物を捕まえて食料にできれば、たとえ農作物が全滅しても、みんな飢え死にしなくてすむじゃない？　何があっても、みんなでご飯を食べられる。これって、ファイブちゃんのおかげだと思う。

「トロルはこれでよし、と。後はひたすら煮込むだけ。次は……と」

ぶつ切りにしたトロル肉を大鍋に放り込んだ後は、調理場の隅に置いてあった樽を開ける。つーんとお酒のニオイ。二週間前から準備してたのがコレ。

「うん、いい感じ」

調理台の上に並べて、と。

「てぇぇぇぇいっ！　ていっ！　ていっ！」

叩く！　叩く！　棍棒でひたすら叩く！

る赤いキノコをサラダに入れようとして、フォウちゃんにめっちゃ怒られてた。メゲないっていうか、ブレないよね、ファイブちゃんは。

今でもファイブちゃんは「トウお姉様、これ、お料理できないかしら？」って、変わった食材を手土産に遊びに来てくれる。そのたびに、あれこれ工夫して新しいレシピを考えるんだけど、これがまた楽しいの！

そのままだと、とても歯が立たない硬いお肉をどうやって柔らかくするか、鼻が曲がりそうなくらいのニオイをどうやって消すか。叩いたり、干したり、お酒や油に漬けたり。絶対ムリって思ってた食材がおいしいお料理に変わったときの感動といったら！

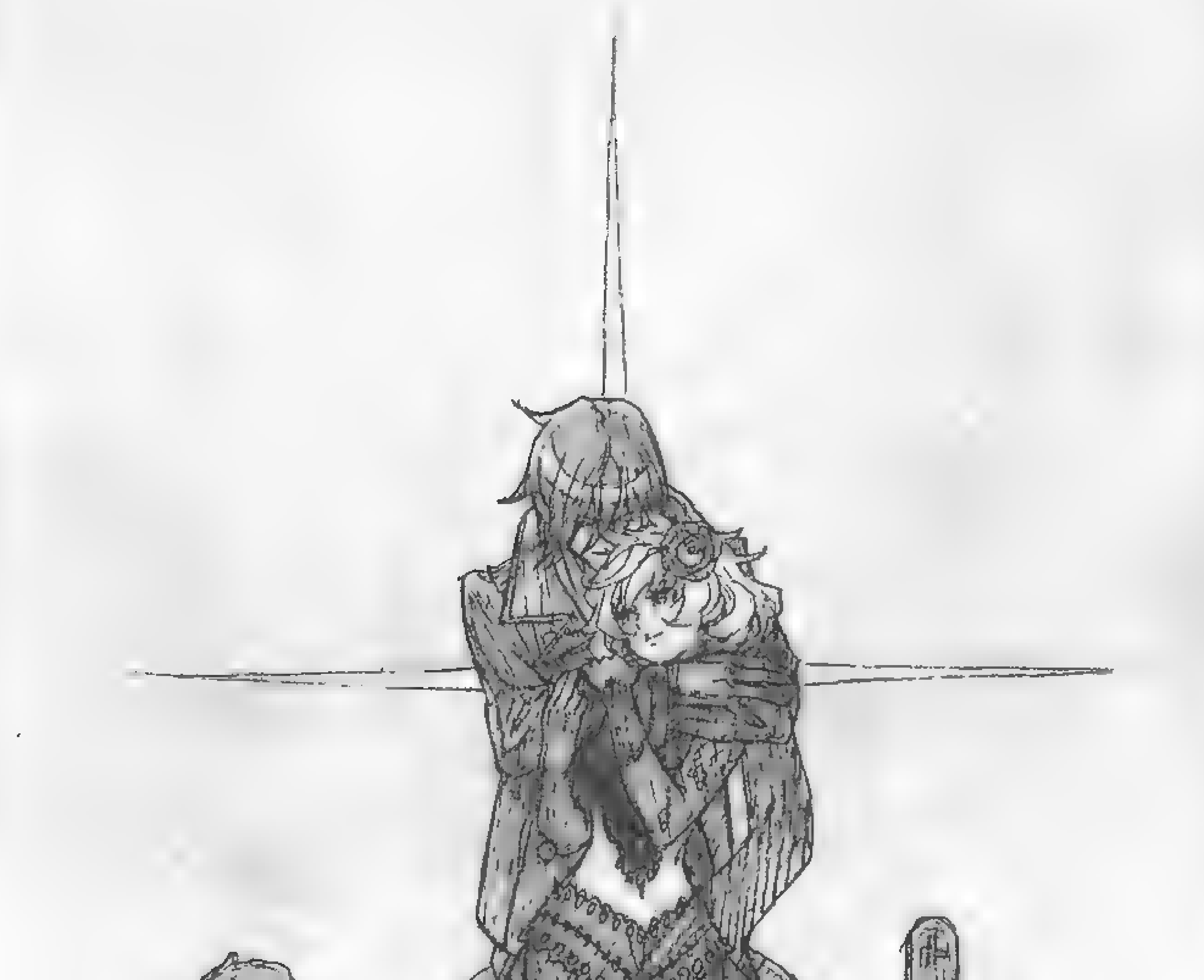
ファイブちゃんもその辺はわかってるらしくて、最初はちょっとめずらしいお魚とか木の実くらいだったんだけど、だんだん難易度の高いモノを持ってくるようになったんだよね。肉食の植物とか、毒針のある巨大魚とか。やっぱり、壁は高いほど燃えるってコトかな。

こないだなんて、砂漠でサンドワームを狩ってくるんだもん。ビックリしちゃった。何メートルもあるヤツ。

そこまでヤル気を見せられると、こっちとしても全力でお相手するっきゃないじゃない？　うんとがんばって、何日もかかって、やっとサンドワームのスープが完成したときはうれしかったな。努力が報われるって気持ちイイよね！

ミノタウロスのスジ肉を叩きまくる。
「ていっ！　ていっ！　ていっ！」
とにかく叩いて、叩いて、叩いて。叩いてるうちに、ちょっと落ち着いてきた……かも？
さすがに息切れしてきたけど。それと、スジ肉が挽き肉になっちゃったけど。調理台にもちょっとヒビが入っちゃったけど。
「ま、いっか。へへへ」
「トウおねえちゃまー」
気を取り直して、お野菜を刻もうとしたときだった。
「あそぼー」
「あそんでー」
入り口のところから声がした。いくつも。
「あれ？　みんな、どうしたの？」
調理場の入り口に並んでる、かわいい顔。ちっちゃな子達。
この子達はみんな、家族がいない。砂の国は貧しい国だし、前の領主がひどいヤツだったから、大人も子供もたくさん死んだ。この子達は生き残ったけど、ひとりぼっちになっちゃった。
だから、みんなでいっしょに暮らすことにしたんだ。おとうさんとおかあさんがいなく

「トウ、それはいったい？」
「ミノタウロスの脚だよ。スジ肉っていうんだっけか。だいぶ前に仕留めたヤツ。食べきれなくて塩漬けにしたじゃない？」
それを二週間前によく洗って塩抜きをして、お酒に漬けておいたんだよね。ミノタウロスの肉って味はいいんだけど、硬いから。
「よーく叩いて柔らかくして、刻んで、お野菜といっしょに炒めるの。……って、あれ？わたし、さっきから何作ってるか、しゃべっちゃってない？　見ちゃダメって言った意味、なくない？」
「いいえ。そんなことはありませんよ。私ほどの使徒になると、説明されても意味がわからないなんて、当たり前ですから」
「きゃー！　すごーいすごーい！　セントってば、すご〜〜〜い！」
どうしよう。また心臓ばくばくしてきたっ！
なんでセントって、こんなにカッコよくて、ステキなんだろ？
セントのこと好きすぎて死んじゃいそう。
ダメダメダメ！　死んじゃったら、セントといっしょにいられないもん。
でもでも！　もう心臓もたないよー！　バクハツしちゃう！
「えーい！　静まれ！　わたしの心臓！　てーいっ！　ていっ！　ていっ！」



でも、みんなで暮らせば寂しくないから。
わたしも、ワンねぇちゃんやスリイちゃん、フォウちゃん、ファイブちゃんがいたから、寂しくなかった。おとうさんとおかあさんのことを思い出して、時々、泣きたい気持ちになったけど、みんながそばにいてくれたから。
「みんな、今日はお泊まりしに行くんじゃなかったっけ？」
今日は神殿の人達みんながお休みだから、この子達は近所の家で預かってもらうことになってたんだよね。
「あのねー」
「帰ってきちゃった」
「トウおねえちゃまといっしょがいい」
「あそぼうよー」
手をつないで調理場の入り口に並んでるかわいい子達。今のわたしの……家族。
とん、と肩に手が触れた。
「私は構いませんよ、トウ」
振り返れば、セントが微笑んでいる。
ああ、セントは全部、わかってくれてる。わたしの気持ち、わたしが望んでいること、わたしの大切なもの。何もかも全部。

＊ ミカエル

消えゆく者達

Warning!

この短編にはネタバレが含まれています。ゲームプレイ後にお読みになることを推奨します。

それって、わたしがウタヒメで、セントが使徒だからじゃないよね？　わたしがウタヒメじゃなくて、セントが使徒じゃなくても、わたしはセントを好きになったし、セントもわたしを好きになってくれたよね？

何があっても、わたしはセントが大好きだし、セントもわたしを好きでいてくれるよね？

「二人きりのディナーはまた今度にしましょう」

「うん。ありがとう、セント」

セント、大好きだよ。世界中の誰よりも。わたし、あなたに出会えてよかった。

「ちょっと待っててね。今、おいしいご飯を作ってるから、みんなで食べよう！」

わーい、と歓声が上がった。大好きなセントと、大好きなみんなのために、わたしは料理の続きに取りかかった。

の武器だったか……。

「ええい！　そんなことはどうでも良い！　忌々しい奴らが！　地を這う者の分際で竜種たる我に……うわわっ！」

熱にも似た痛みが翼をかすめる。今度は複数。

「おい、最後まで言わせろ……わっ！」

いつの間にか、〝虫〟の代わりに〝傀儡〟どもが地上を埋め尽くしていた。いや、単にこちらが敵の懐深くまで入り込んでしまっただけなのだが。見れば、何やら結構な大きさの武器までが持ち出されている。複数の〝傀儡〟がやっとこさ動かせるような、巨大な奴だ。しかも、それはこちらを狙っているではないか。

「こ、これは、まずい……か？」

逃げきれるか？　いやいや、誇り高き竜種が敵に後ろを見せるなど！　しかし、この状況ははっきり言って、まずい……。

「何をぼさっとしておるか！」

横合いから怒鳴られ、我に返った。あの大型の武器が炎に包まれている。それを操っていた〝傀儡〟数体も。

「全く無茶をやりおる」

呆れたような口調と赤い翼と。これは、もしかして。いや、もしかしなくても「危ない

気がつけば、いつもそこには戦いがあった。
いつもいつも俺は……いや、我は戦っていた。寝ても醒めても。夢の中でさえも。
いったいどれくらい前から、そして、どれだけの敵を倒してきたのか、そもそも自分が何のために戦っていたのか、思い出せなくなるほど遠い昔から。ずっと。

＊

「下等な虫けらめ！　死ぬがいい！」
わずか一息。軽く炎を吐いてやっただけで、下品な色でてらてら光っている〃虫〃どもが灰に変わった。数ばかり多くて貧弱で、竜種の敵としては不足この上ない虫けらだが、こうして一気に焼き払う分には良い気分転換になる。
「おらおらおらおらーっ！」
炎が舐め尽くした後の地上には、塵ひとつ残らない。実に爽快だ。
「俺の名前……いや、我が名はミカエル！　偉大なる竜種の……うわっ！」
広げた翼に痛みが走った。
「くそっ！　〃傀儡〃もいたのか！」
虫けらの群れに混じって、投射用の武器が見える。〃虫〃に比べれば多少なりとも知恵があるのか、〃傀儡〃どもは武器の類を使う。正直、あれは苦手だ。ええと、何という名

なのに、こいつは未だ名乗ろうとはしない。こちらから名乗ってやったにも拘わらず。

まあ、この赤いのに限らず、お高く止まった年寄り連中は皆、そうだった。

赤いのに言わせれば「本来、我らに名乗る習慣はない」そうだが、知ったことか。そもそも名乗りも上げず、まともに会話もせず、死んだ魚のような目をして戦っている連中に倣おうなどとは思わない。

戦いの経験を積んで強くなるのは楽しい。己の力を示すのは誇らしい。いかに効率よく数多くの敵を倒すか、考えるのは面白い。敵にしてやられれば腹も立つし、仲間が傷つけば悲しい。そういうものじゃないのか？

勝っても負けても、目の前で何が起きても無言のまま。あんなふうにはなりたくない。だいたい、連中は何が面白くて生きているのだ？

「そう言うな、ミカエル。おぬしも長く生きてみればわかる」

赤いのはいつも、そう言って話を締めくくった。その悟りきったような言い方が、俺は嫌いだった。それに、長く生きているといっても、こいつは俺に比べてせいぜい二千年ばかり早く生まれたに過ぎないのだ。

かといって、ただ凶暴なばかりの「黒いの」も好きになれなかった。そう、赤いのと同じくらいの年格好の黒いドラゴン。こいつがまた、やたらめったら目立つ。

無言のままというのは奴も他の年寄り連中と同じだが、戦いぶりにおいては群を抜いて

ところを助けてもらった」という状況のような。仲間と助け合うというのは麗しい話だが、一方的に助けられるだけというのは、竜種としての沽券に関わるというか何というか。

「何をぽかんと口を開けている？　無駄死にしたいか！」

「う、うるさいっ！」

同属とはいえ、こいつの態度は尊大に過ぎる。なんかムカつく……。

「早く退けと言うておろうが！」

「わ、わかった」

これが、いくらか年嵩のレッドドラゴンとの出会いだった。

＊

「起きろ。ミカエル！」

その声で目が覚めた。どうやら俺は戦いのさなかに夢を見ていたらしい。それも、よりにもよって「お節介な赤いの」と出会ったときの夢を見るとは。

「戦いの真っ最中に居眠りとは、たいした度胸よ」

「う、うるさい。この程度のザコ、寝ぼけていても一掃できるっ！」

あれから、何度かこいつと共に戦った。というよりも、思い出したようにやってきては、要らぬ世話を焼いていくのだ、この赤いのは。



いる。強い奴は好きだ。それで、俺のほうから声をかけてみたのだが、黒いのはシカトしやがった。ムカつく野郎だ。

「また考え事か？　頭を使うのは悪いことではないが、時と場合によるぞ」

「うるさい！」

戦いの最中に意識を散らすのは好ましいことではない。いや、はっきりと危険だ。が、それを指摘されるのは面白くなかった。それで、なんとなく話題を変えてみた。

「なあ、赤いの。この戦いはいつになったら終わるんだろう？」

なんとなく話題を変えたつもりが、実はずっとこれを問いたくてたまらなかったのだと気づく。

数え切れないほど殺した。数え切れないほど骸（むくろ）と瓦礫（がれき）の山を築いた。なのに、続いている。終わらない。敵は後から後から湧いてくる。

いったい俺達は「何」と戦っている？　いや、敵が何者なのかはわかっているのだが、そんな意味ではなくて。ああ、うまく言えない。もどかしい。

「ミカエル。我とてこの戦いの始まりは知らぬのだ。まして終わりなど……」

その言葉が唐突に途切れる。視界が白くなった。

＊

代わりに、大地は狭くなっていた。いつの間にか「人間」だの「亜人」だので溢れ返っていたのだ。彼らの繁殖力は驚くほどで、あの〝虫〟や〝傀儡〟以上の大増殖を続けていた。ただ、繁殖力は高いものの、彼らは短命である。しかも、弱い。ちょっとしたことで動けなくなり、あっという間に死んでしまう。

今、背に乗せている人間も、もういくらも経たずに死ぬのだろう。これまで共に戦った人間達がそうだったように。

そうなのだ。これほど弱い存在でありながら、人間達は戦おうとする。短い命をさらに縮めてまで武器を取る。理解できない。だからだろうか、彼らと共に戦おうなどという気まぐれを起こしたのは。

「ミカエル」

背中から聞こえる声がわずかに震えていた。怖がっているのか？　男のくせに女々しいことだ。

「すまない。巻き込んでしまって」

「勘違いをするな。たかが人間に巻き込まれるほど落ちぶれてはおらぬ。共に戦うと決めたのは我。そもそも人間どもの戦いなど、竜種にとって遊技も同然。我を誰だと思っている？　長きにわたる戦いを制し、数多の骸と瓦礫の山を築き上げ……」

すまない、とまた声がしたような気がした。これだから人間というやつは。

「なんだ、夢か……」

奇妙な夢だった。夢の中で夢を見ていた。戦いのさなかに、遠い昔の戦いの夢を。

「どうした？」

背中から声がする。なんでもない、と騎乗する者に答えを返した。あの戦いが終わった後に現れた「人間」という種族だ。

永久に終わらないのではないかと思えたあの戦いは、突然に終わった。種の存亡を賭けた戦いでありながら、あまりにも呆気なかった。何しろ、戦いそのものが消滅してしまったのだ。夢の中にも出てきたのは、その光景だった。

視界が白くなったと思ったのは、何らかの術による爆発だったらしい。いったいどちらの術だったのか、或いは何かのチカラが暴走に近い状態に陥った結果なのか、詳細は知らない。だが、その威力はすさまじかった。あれだけ無数に湧いていた敵がすべて消し飛んでしまったのだから。地形すら変わってしまうほどの大爆発だった。

我々竜種が生き残れたのは、堅牢な鱗に守られた強靱な身体のおかげだろう。もっとも、生き残れた者は少なかった。我々は仲間の大半を失ってしまったのだ。

一時は空を埋め尽くすほどの大群であったという竜種も、今は滅多に同属と遭遇することはない。狭かったはずの空がやたらと広く感じられるようになってしまった。「赤いの」も「黒いの」も生き残ったが、もう長いこと会っていない。

かのような。
　言われずともわかっている。戦いに勝っても負けても、人間は死ぬ。すぐに死ぬ。たとえ勝利を手にしても、それは束の間に過ぎない。だとすれば、人間の戦いとは何と無意味なことか。
　いや、そうだろうか？　果たしてそれは人間に限った話か？　我ら竜種の戦いが無意味でなかったと言えるのか？
　長い長い時を経て戦い続け、数多の仲間を失った。こうして振り返れば、あの年寄り連中でさえ懐かしい。あの戦いがなければ、今も連中はむっつりと押し黙ったまま、面白くもなさそうにその辺に屯していただろうに。
「そう言うな、ミカエル。おぬしも長く生きてみればわかる」
　不意に、赤いのの言葉が思い出された。少しばかり年嵩だったあいつは知っていたのだ。長く生きるということは、失うということだ、と。失い、置いていかれ、独りきりになること。何ひとつ得るものもなく……。
　人間達の戦いに肩入れしてきたのは、彼らとなら何かが得られるのではないか、と心のどこかで期待していたのかもしれない。短い命をさらに縮めてまで武器を取る彼らは、長い寿命を持つ我ら竜種には知り得ない何かを知っているのではないか。
　だが、同じことだった。何度繰り返しても、何も残らなかった。何ひとつ。

「ゆくぞ！」

がらくたのような城塞に向かって舞い降りる。城壁にびっしりと貼りついた兵隊どもを炎で焼き払い……。

*

「また夢か」

あのときの戦いは何とも後味の悪いものだった。だから、こうして夢に出てくるのだろう。いや、人間に与してての戦いはいつも、何かしら後味の悪さが残る。共に戦った者が必ず自分よりも先に死ぬからだろうか。

あいつもそうだった。最後まで「すまない」と馬鹿の一つ覚えのように詫びながら死んだ。何を謝る必要があるのか、二度と口にするなとあれほど言ったというのに。

冷たくなった骸を静かな岩山の上に下ろし、しばし呆然としていた。人間がすぐ死ぬくらい、わかりきっていたことなのに、それでも喪失感を覚える自分自身に呆れ返っていたのだ。

そのとき、何とも間の悪いことに「黒いの」と久方ぶりに出くわした。奴はちらりと我を見ると、いつものように無言で飛び去っていった。奴の目は、嘲っているようでもあり、憐れんでいるようでもあった。あたかも「人間などに心を許すからだ」と言っている

しかも、この女の寝相がまた途轍もなく悪い。我を足蹴にするわ、ヘソを出して眠りこけるわ……。確か、人間はヘソを出して寝ることを忌み嫌うものだと聞いていたが？

だが、そこが面白い。これまで出会ってきたどの人間とも違う。それもそうか。血を分けた妹達を皆殺しにしようなどという女がそうそう居るはずもない。

もっとも、この女とも共に過ごすのは束の間のこと。この女も、もうすぐ他の人間達と同じように我を置いていく。そこだけは、消えていった他の者達と変わらない。

ただ、それでも構わなかった。見届けてやろうと思った。この女が消えていく最期の時まで。そして、それが約束でもある。今日、この女が妹達を殺した後に、我は……。

「その約束だけは守ろう。何があっても決して違えぬ。竜種たる我の……あたっ！　また蹴りおって！　だいたい、最後まで言わせろと何度……」

ぐー、といびきが聞こえた。寝付きが良いにも程があるわ！

……………ふっ。まあ、良いか。これも一興。

「おい？　ここはどこだ？　誰かいないのか？」
気がつけば、辺りは漆黒の闇だった。生き物の気配も、生きていないモノの気配も、何もない。
「誰も……いないのか」
ふん。これも夢の続きなのだろう。どうせ、すぐに目が覚める。戦いの真っ只中で。ああ、また戦いか。いい加減、戦いにも飽いた。繰り返しても、繰り返しても、最後には消えるだけなのだから。
そうか、同じか。戦いも、夢も。すべてが消えて無くなる。
何もない。無。ゼロ……。

＊

「あたたっ！」
ガスッと顎の下を何かが直撃した。今度こそ、本当に目が覚めた。
「全く。寝相の悪い奴め」
強かに蹴りを入れてきたのは、最近知り合ったばかりの人間だった。ゼロという名の、無神経で粗暴で面倒臭がりで大飯喰らいで減らず口を叩いてばかりの女。人間のくせに、竜種たる我をまるで恐れず、バカ呼ばわりだ。やれやれ。

ワン

来訪者

わ大きくなり、馬が緊張するのがわかった。こうした騒ぎに慣れていないせいだ。馬は体臭がきつくて好きではないけれども、気持ちは理解できる。

港から教会までの道をひたすら我慢して行かねばならないのは、私も同じこと。できることなら、日が落ちてから誰にも気づかれないように、こっそり教会に戻りたかった。一人になりたかった。戦いの日々で疲れ切った心身を休めるために。

けれども、それは私の身勝手な望みにほかならない。この世界が平和と秩序を取り戻したことを人々に印象づけるためにも、ウタヒメは華々しく凱旋したほうがいい。

人々の無邪気な歓声が、鋭敏すぎる聴覚を持つ私にとって、頭蓋(ずがい)を叩き割られるかのような痛みと不快感を伴うものであったとしても。

〈1月27日〉

教会都市に帰還してからの日々を、私はひたすら書庫に籠もって過ごした。書庫はいい。分厚い本を詰め込んだ書棚が物音や人の声を遮(さえぎ)ってくれるから、どこよりも静かだ。埃(ほこり)と黴(かび)の臭いばかりは如何(いかん)ともし難いけれども、人や獣の体臭に比べれば数段ましだった。私の場合、鋭いのは視覚と聴覚だけではない。五感のすべて、嗅覚も触覚も味覚も、どれもが尋常ではなかった。

子供の頃は今ほどではなかった。物心ついたばかりの頃は、人よりいくらか鋭い程度の

〈西暦999年1月1日〉

年も改まったその日、教会都市に集う人々の表情は喜びに満ちていた。人並みはずれた視力のおかげで、私には彼らの笑顔が本物だとわかる。その輝きに満ちた目や、笑いが零れ落ちているとわかる口許に、緩みっぱなしの頬に……。眉間に皺を寄せている顔なんてひとつもなかったし、作り笑い特有の、不自然に力の入った口角を目にすることもなかった。

砂の国、森の国、山の国、そして海の国の領主を倒し、各地の残党を一掃し、民を圧政から解放したウタヒメの凱旋。人々はずっと今日という日を待ち望んできた。

たぶん、この場で作り笑いを浮かべているのは私一人に違いない。眉根を寄せてしまわないように注意を払い、耳を塞いでこの場に座り込みたくなるのを堪えているのは、ほかならぬウタヒメの私だけ。

やっぱり妹達も連れてくるべきだった、という思いを私は急いで振り払う。ウタヒメが五人揃って教会に入れば、相当に見栄えがしたに違いないけれども、妹達にはそれぞれの責務がある。平定したばかりの国を空けるのは、統治者として好ましいことではない。

それに、もうすぐ妹達をここへ呼び寄せなければならない。刻限が迫っているのはわかっていた。

沿道を埋める人々に向かって、私は馬上から微笑んで手を振ってみせる。歓声がひとき

長はその筋力だった。

決して筋肉質には見えず、むしろ華奢な体型のトウだったが、その腕力、脚力はすさまじい。本人はごく当たり前に扉を開けようとしただけであっても、真鍮製の取っ手がねじ切れてしまうほど。

もしかしたら、また筋力が強くなったのかもしれない。周囲の者たちに怪我をさせたりしないように、トウはいつも動作に注意を払っている。そのトウがこんなふうに物を壊してしまうのは、筋力が急激に成長して感覚的な制御が及ばなくなったときだった。筋力の成長というのは一定のものではなく、しばらく横ばいの状態が続いたかと思えば、不意打ちのように急激な成長曲線を描くこともある。

それでも、トウの場合は他の妹達に比べて、外見的には無難な成長の仕方だった。スリイなどは、常人の何倍もの速さで髪が伸びるという身体だったから、頻繁に髪を切らなければならず、いつもハサミを持ち歩いていた。

爪が伸びすぎるフォウも大変な思いをしていたようだ。多少は放置できる髪と違って、爪はあちこちに引っかかるし、折れたり割れたりする。いつの間にか、伸びた爪を噛み切る癖がついてしまって、それを直すのにも一苦労だったらしい。爪は今でもフォウにとって劣等感の源なのだろう、自分の手を隠そうと必死になっている姿が痛々しくもある。

対照的に、やたらと発育の良すぎる胸を得意げに突き出していたのが、末っ子のファイ

五感だった。ところが、長じるにつれて、私の五感は非常識な速さで成長を遂げていった。常に騒音と臭気に悩まされ、肌に触れるものは衣服であっても不快感を催し、何を食べても美味に思えず、過剰な視覚情報が神経を疲弊させる。

ウタウタイは、特定のどこかが過剰に成長していくという身体に生まれついている。私の場合、それが五感だった。常人では持ち得ない強大な力を行使できるのだから、ごく当たり前の日常生活を望むほうが間違っているのだ。

不意に足音が聞こえた。走ってくる足音が一人分と、それを追いかける早足がもう一人。が、途中でそれらは慌てたように止まる。そして、少しでも音をたてまいとつま先で歩く気配に変わった。

やがて、書庫の扉を遠慮がちに叩く音がした。もう私にはそれが誰なのか、わかっていた。明るくて活動的で、しかし私の鋭すぎる聴覚を気遣う優しさの持ち主、だ。

「鍵は開いてる。早かったな」

トウ、と声をかけようとしたのと同時に、扉が嫌な音をたてた。きゃっ、と小さな悲鳴が上がる。

「ごめんね……。壊しちゃった」

すぐ下の妹トウが扉の陰から今にも泣き出しそうな顔で現れた。ちぎれた扉の取っ手を握りしめて。私にとって五感の成長が尋常でなかったように、トウにとっての突出した成

ているらしい。彼はトウの使徒だった。ウタヒメには必ず使徒がいる。ウタヒメを助け、仕える者が。

「もしかして、わたしたちが一番乗り？」

そうだと答えると、トウは目を輝かせた。

「やった！　一番だって！」

「私にとっては常にあなたが一番ですよ、トウ様」

「もう、セントったら。でもね、わたしもセントが一番だよ。世界中で一番、セントが好きー」

トウが頬を染めて力説する。この二人は、年がら年中同じようなやりとりをしているのだ。見ているこちらが恥ずかしくなるほどだったが、ウタヒメと使徒が強い愛情で結びついているのは望ましい。

とはいえ、放っておけばこの二人は際限なくイチャつき続けるから、私は早々に話を戻すことにした。

「それで、国の様子は？」

「あ、うん。砂漠にね、こーんな大きな魔物が巣を作っちゃって大変だったんだけど、ちゃんと退治してきたよ」

私が尋ねたいのは、それまでの特権を剥奪（はくだつ）された貴族階級の連中がどうしているか、彼

ブだった。子供の身体に豊満な乳房というのは悪趣味で下品だと、フォウなどは陰口を叩いていたものだ。今思えば、劣等感の裏返しだったのだろう。しかも、ファイブ本人が至って満足そうにしていたのが、尚更フォウには気に障ったに違いなかった……。

「ワンねえちゃん、どうしよう」

トウの声で、私は我に返った。

「心配しなくていい。どうせ古くて壊れかけてたんだ」

「ほんとに？」

「ああ」

後で誰かに直すように言っておくから、と私が言うと、トウはたちまち元気を取り戻した。半べその顔が一瞬で笑顔に変わる。こういう単純なところは、幼い頃からちっとも変わっていない。

「久しぶりだね、ワンねえちゃん！　元気してた？」

実際には、言うほど離れていたわけではない。トウとその使徒と共に、貴族の反乱を鎮圧しに行っている。あれからまだいくらも経っていなかった。

「って、久しぶりってほどでもないんだっけ」

傍らに立っていた男がうなずいて同意を示した。黒髪をかき上げる仕種が私には気障ったらしく見えて仕方がないのだけれども、トウは全く気にしていない。むしろ、気に入っ

る。いったいどこの誰が集めたのかは知らないが、教会の書庫には古今東西のあらゆる書物が収められているという。この中にならあるかもしれない。ウタウタイについて詳細に書き記された本、「なぜ、私達ウタウタイが存在しているのか？」という疑問に答えてくれる本が。

〈2月14日〉

山の国を統治しているフォウとその使徒デカートが到着したのは、私の予想よりもかなり早かった。山の国は教会都市から最も遠方にある。

「一緒に行きましょうよってスリイ姉様も誘ったんだけど。お人形が完成してから行くって断られてしまったの」

フォウはそう言って、大げさにため息をついた。スリイが統治する森の国は山の国と隣接している。

「いつものことだ。気にするな」

おおかた断られたのではなく、無視されたのだろう。スリイは姉妹の中で一番の変わり者だった。子供の頃から人形が好きで、人形を作っている最中は誰の言葉も耳に入らないし、寝ることも食べることも忘れてしまう。折悪しく、フォウはスリイの人形作りが佳境に入ったところで声をかけてしまったに違いない。

らが良からぬことを企てている兆しはないか、ということだったが、トウにとってはそうではないらしい。トウが話題にしたのは、魔物の被害や農地の作柄についてだった。

もっとも、農作物に関心を寄せていられるのだから、砂の国は概ねうまくいっていると考えていい。周囲の者達もトウのために尽力してくれているのだろう。兵士達はトウのためなら命を捨てることも厭わないほどだというし、領内の民は誰もがトウを慕っていると聞く。

砂の国は、広大な国土の大半が砂漠と荒れ地によって占められている。大地の実りは乏しく、民の暮らしは苦しい。せめて人々の心が明るくなるようにとトウに統治を任せたのだが、その読みは間違ってはいなかった。

「ねえねえ、みんなが来るまで教会の中を探検してもいい？　いいよねっ！」

私がうなずく前に、トウは回れ右をしていた。考えてみれば、トウが教会都市に滞在したのは、半年以上前のことだ。あのときもトウは教会を探検しようとしたが、果たせなかった。それほどに慌ただしい滞在だった。トウにしてみれば、せっかく再訪したのだから今度こそ、と思ったのだろう。

子供の頃と変わらない足取りでトウが出て行くと、黒髪の使徒も一礼してその後に続いた。書庫は再び静かになり、私は本の背表紙を読む作業に戻った。

書庫に籠もっていたのは、静かだからという理由だけではない。調べ物をするためであ

って、むしろ人間のほうが数の上では少ない。だからこそ、スリイが適任だと判断した。
人外の者達は人間の干渉をひどく嫌う。彼らとうまくつき合うには、うまく放置できるかどうかが鍵になる。これまで森の国を治めてきた領主達にはそれができず、何度も人外の者達の制圧を試みては失敗してきたらしい。もともと領土的野心など欠片も持ち合わせていないスリイなら、彼らのような失敗を繰り返すことはない。
それに、スリイにはあまり人と関わらせないほうがいい……。
「ワン姉様？」
「ああ、なんでもない。続けてくれ」
「これで終わりよ。山の国も森の国も問題なし。悪辣（あくらつ）な領主はいなくなり、民は安心して暮らしている。収穫したばかりの農作物を根こそぎ持って行かれることもなければ」
「無茶苦茶な賦役に駆り出されることもない、か」
フォウがうなずいた。が、これで終わりという言葉とは裏腹に、立ち去る様子がない。
「どうした？」
何か言いたいことがあるのは一目瞭然だった。
「本当に……戦うつもりなの？」
「だから、妹達（キミ）を呼んだ」
でも、とフォウが遠慮がちに続けた。

「それよりも」
「国の様子ね？」
「話が早いな、フォウは」
フォウは得意げな顔になって、山の国の報告を始めた。
「すべて順調。もともと人口が少ない土地でしょう。農地も居住地も広すぎないから、統治しやすい国なのよ。それを荒らすなんて、歴代の領主達の無能さには呆れ果てるわ」
もっとも、そういう国でなければフォウに任せたりはしなかった。フォウは頭が良く、真面目な性格だったが、不測の事態に弱い。すぐに恐慌状態に陥り、自分の殻に閉じこもってしまう。或いは逆ギレするか。要するに、広大な土地と多くの人口を擁する国の統治には向かないのだ。
「山の国については心配していない。森の国はどうだった？」
フォウがスリイにわざわざ声をかけに行ったのは、理由がある。隣国の様子を気にかけてほしい、と私が頼んでいたからだ。変わり者のスリイに統治を任せるのは、私としても賭けだった。
「それがね、意外なんだけど、うまくやってるみたい。あのムカつく妖精族とか、お高く止まったエルフ族とかを相手によ？　ちょっとスリイ姉様を見直したわ」
森の国に住まうのは人間だけではない。妖精たちの住処だの、エルフの隠れ里だのがあ

い。それがフォウをますます苛立たせている。
二人の足音が完全に聞こえなくなると、私は調べ物を再開した。帰還してからずっと、ウタウタイについての記録を探し続けてきたが、まだ見つからない。使徒についても同様だった。
たぶん、私の探し方が悪いのだろう。「ウタウタイ」や「ウタヒメ」ではなく、別の呼称で扱われているのかもしれない。これほど強大な魔力を行使する存在が記録されていないはずがなかった。しかも、私達の「ウタ」は、いわゆる魔法を発動するための呪文の詠唱とは根本的に異なる。魔法研究に携わる者ならば、記録せずにはいられないはずだ。なのに、見つからない。なぜ？　何者かが意図的に隠匿（いんとく）した？　或いは破棄した？　だとしたら、何のために？

〈2月22日〉
「私達（わたくしたち）が最後だと思っておりましたのに」
ファイブは意外そうに首を傾げた。
「スリイお姉様がまだいらしてないって、トウお姉様が」
私にとっては意外でも何でもなかった。遅れてくるとしたら、人形作りで時間を忘れたスリイか、教会都市に最も近い国にいることに油断をしたファイブのどちらかだと思って

のがあるのは我慢できない、という強欲なたちだった。これ、と決めたものは何が何でも自分のものにする。強引で、時には周囲の顰蹙を買うこともあるが、不安定な国を統治するにはこの上ない資質だろう。

「そういえば、港の修復はどうなった？」

海の国の残党を一掃する際に、不本意ながらいくつかの港を破壊してしまったことを思い出したのだ。細心の注意を払っていても、周囲を巻き込まずにチカラを行使するのは難しい。それほどまでに、私達のチカラは強くなっていた。

「そちらも滞りなく。東の国からも商船が来るようになりましたのよ」

「おかげで、ファイブは散財しまくり。前の領主が溜め込んでた宝石、全部売っ払っちゃってさ」

前の領主は女で、城の中にいくつもの衣装部屋や宝物庫を持っていた。ファイブは大喜びで、夥しいドレスや宝石類を我が物とした。これも元はといえば民のものなのだが、私は敢えてファイブの好きにさせておいた。ファイブは強欲だが、飽きっぽい。手に入らないものには執着するが、一度手に入れたものには興味をなくしてしまう。

案の定、煌びやかな装身具にも飽きたファイブは、それらをあっさりと手放し、代わりに東の国々の珍しい品を手に入れた、というわけだ。まあ、それらの品々にも遠からず飽きてしまって、また別の物との交換を試みるに違いない。結果として、海の国では交易が

のがあるのは我慢できない、という強欲なたちだった。これ、と決めたものは何が何でも自分のものにする。強引で、時には周囲の顰蹙を買うこともあるが、不安定な国を統治するにはこの上ない資質だろう。

「そういえば、港の修復はどうなった？」

海の国の残党を一掃する際に、不本意ながらいくつかの港を破壊してしまったことを思い出したのだ。細心の注意を払っていても、周囲を巻き込まずにチカラを行使するのは難しい。それほどまでに、私達のチカラは強くなっていた。

「そちらも滞りなく。東の国からも商船が来るようになりましたのよ」

「おかげで、ファイブは散財しまくり。前の領主が溜め込んでた宝石、全部売っ払っちゃってさ」

前の領主は女で、城の中にいくつもの衣装部屋や宝物庫を持っていた。ファイブは大喜びで、夥しいドレスや宝石類を我が物とした。これも元はといえば民のものなのだが、私は敢えてファイブの好きにさせておいた。ファイブは強欲だが、飽きっぽい。手に入らないものには執着するが、一度手に入れたものには興味をなくしてしまう。

案の定、煌びやかな装身具にも飽きたファイブは、それらをあっさりと手放し、代わりに東の国々の珍しい品を手に入れた、というわけだ。まあ、それらの品々にも遠からず飽きてしまって、また別の物との交換を試みるに違いない。結果として、海の国では交易が

いた。

「だから、急がなくていいって言ったのにさ」

ファイブの使徒は黙っていれば華奢な美少年だったが、口を開くと台無しになる。いつだったか、逆ギレしたフォウが「生意気なクソガキ」と罵倒していた。私も概ね同感だ。

「ファイブは僕の言うことなんかちっとも聞かないんだから」

「あら、そんなことなくてよ？」

「昨夜だって、もう寝ようよって言ってるのに、いつまでも寝かせてくれなくて……」

私は咳払いをして使徒の言葉を遮った。

「手短に済ませよう。国の様子は？」

海の国は、領主の権力がとりわけ強かった。あらゆる富と力とが領主とそこに群がる連中に集中していた。それを奪われた彼らは、さぞや私達を恨んでいることだろう。元はといえば、民から不当に吸い上げたものなのだから、奪われたというのは筋違いな話だが。

いずれにしても、不穏分子の数で言えば、あの国は他とは桁違いに多い。鎮圧に手を焼いているのではないか、と思ったのだが、それは杞憂に過ぎなかったらしい。ファイブはくすりと笑って、片目をつぶった。

「ご心配には及びませんわ。領主の取り巻きは、すべて私の下僕にしてあげましたの」

ファイブは欲張りだから、と傍らの使徒が苦笑した。ファイブは昔から手に入らないも

だ。身体が子供だった頃は、もっと強くなりたいと願っていた。けれども、今は、どこまで強くなるのか、それが恐ろしくもある……。

「わかった。話は終わりだ」

調べ物があるからと、私は早々に二人に背を向けた。嘘ではない。早く作業に戻りたかった。これだけ探し続けているのに、ウタウタイについての記述はまだ見つからない。私は焦っていた。

もしかしたら、そんなものはどこにもないのではないか、という不安を振り払いたくて、私は急いで本のページを繰った。

〈西暦999年3月4日〉

スリイがやって来たのは、まさに「その日」の朝だった。

一向に捗（はかど）らない調べ物に苛立ちながら、私は早朝から埃まみれの書物を積み上げていた。足音よりも先に聞こえてきたのはハサミを鳴らす音だった。そして、不規則な足音が一人分に、規則的な足音が一人分。スリイと、その使徒の歩く音だった。

「朝は二本、昼は十二本、夜は一本……」

思わせぶりに扉が開く。

「……なあんだ？」

活発に行われるようになるだろう。
人口の割には耕作地が少なく、また農耕に適した気候とは言い難い海の国である。海洋資源にも期待できるが、それだけでは心許ない。交易によって人と物を動かしたほうが民は豊かになれるはずだ。
「宝石だけじゃなくて、ドレスも処分しましたわ。だって、胸がきつくて着られなくなってしまったんですもの。発育が良すぎるのも考えものですわね」
ファイブの傍らで、使徒がわざとらしく肩をすくめた。愛らしい顔に似つかわしくない、底意地の悪い笑みを浮かべて。
「それ、フォウの前で言ったら殺されるよ？」
これまで何度もフォウを激怒させた張本人がどの口で……と、言いかけてやめた。それ以上に気がかりでならないことがあったのだ。
トウの筋力は明らかに強くなっていた。フォウは武具を装着して手を隠しているけれども、夜となく昼となく爪を切る音が聞こえている。ということは、フォウの爪の伸びも相変わらずなのだろう。私自身の五感も少しずつではあるが、今も鋭さを増している。書庫にいても物音や話し声をうるさく感じることが増えてきたからだ。そして、胸がきつくて着られなくなった、というファイブの言葉。
私達の身体の歪な変化は、ウタウタイのチカラが今もなお成長を続けているということ

は、子供の頃からのスリイの口癖だ。人形を作っていないときはいつも怠そうにしていて、どこにでも座り込み、どこででも眠る子供だった。
「本の上には座るなよ。古い本ばかりだから崩れて危ない」
まさに積み上げた本に腰を下ろそうとしていたスリイが、ゆらゆらと身体を揺らしながら真横へと移動した。
「少し寝室で休むといい」
森の国もまた山の国と同じく遠方にある。スリイばかりでなく、使徒も長旅で疲れているに違いなかった。森の国の様子は、すでにフォウから聞いている。無理に話をする必要もない。
「どうした？」
すぐにでも回れ右をするかと思いきや、スリイは立ち去ろうとしない。無表情のまま、手にしたハサミを弄(もてあそ)んでいる。スリイの考えていることは全くわからない。私に限った話ではなく、傍らの使徒でさえ同様だろう。
ただ、時折、この変わり者の妹は何もかも見通しているのではないか、と思うことがある。私よりもずっと物事を理解しているのではないか、と。今、私が探している答えさえも、スリイはとっくの昔に知っていたのではないか……。
「ワタシは眠らない」

私はスリイの問いには答えずに、ただ「遅かったな」とだけ返した。スリイの謎かけは意味のあるものとそうでないものがある。その多くが無意味な言葉遊びだった。幼い頃は無口だったスリイだが、人形作りを覚えた頃からひどく饒舌になった。人形遊びと言葉遊びはどこか似通ったものがあるのかもしれない。

「もしかして、その髪……。伸びていないのか？」

いつもは膝に届くほどのスリイの髪が、今は丸まった背中の上で止まっている。スリイはひどい猫背だった。

「いえいえ。スリイ様の御髪は、つい先ほど私めが整えて差し上げましたのでな」

ほっほっほっ、と傍らの使徒が笑った。スリイの使徒オクタは一癖も二癖もある老人、といった印象を見る者に与える。実際には一癖どころではないのだが。

「そうか」

やはりスリイの髪も変わらずに伸び続けている。考えてみれば、スリイ一人が例外のはずはなかった。

戦いを目前に控えた今、チカラは強ければ強いほうがいい。だが、その後はどうなる？　最後の敵を倒した後、私達はこのチカラを持て余さずにいられるだろうか？

「……疲れた」

伸びをする代わりに、いっそう背中を丸めてスリイがあくびをした。疲れたというの

いても、何ひとつわからないままだ。仕方がない。そもそも、この膨大な書物のすべてを調べることなど不可能だった。

「ワン姉さんは正しい？　トウ姉さんは正しい？　フォウは正しい？　ファイブは正しい？　ゼロ姉さんは……正しい？」

にこりともせずにスリイが言う。

「自分は正しい。誰もがそう思ってるんだろうな」

そうでなければ戦えないから。間違っていると知りながら戦えるほど人は強くない。だから、私は答えを探していた。私達は間違っていないと、高らかに宣言できる根拠が欲しかった。

そんなものを求めずにいられないほど、私は不安だったのか……。

「ワン姉さん？」

怪訝(けげん)そうなスリイの声で、私は笑っている自分に気づく。

「何でもない。大丈夫だ」

答えがあってもなくても、私のやるべきことは同じ。ウタウタイの何たるかを知らなくても、チカラの存在意義を知らなくても、私は戦える。何を不安に思うことがある？

本を閉じて立ち上がる。ドラゴンの咆哮が微かに聞こえた。間違いない。裏切り者(あいつ)はもうそこまで来ている。

「疲れているんじゃないのか？」
「……雪」
会話がかみ合わないのは、今に始まった話ではない。私は傍らの使徒に目をやった。
「私は忙しい。後は好きにしていろ」
「畏まりましてございま……」
言いかけた使徒を唐突にスリイが遮った。
「雪よりも白い大蛇が運ぶのは、薄紅の牙」
「スリイ？」
「牙の向かう先は……どぉぉぉこだ？」
スリイがじっと私を見つめている。今度は無意味な言葉遊びではない。私にも理解できた。この謎かけの答えが。
雪よりも白い大蛇。白い……ドラゴン。その背に騎乗する薄紅の瞳を持つ者。牙、戦いのための武器を手にして。
ここへ来る途中、スリイは私達が戦うべき敵の姿を目にした、と言っているのだ。今日こそが「その日」だった。私は大きく息を吐く。
「時間切れ、か」
結局、ウタウタイについての記録は見つからなかった。「ウタ」についても、使徒につ

「行こうか。あの日の約束を果たしに」
スリイとその使徒を従えて、私は書庫を後にした。

「行こうか。あの日の約束を果たしに」
スリイとその使徒を従えて、私は書庫を後にした。

＊ ミハイル
ボクたちの失敗

のあたりがキュッて痛くなる。
「どうやったら治ると思う？」
「ああ？　肉でも食って寝てりゃ治る」
「お肉食べたら治るの？」
「ああ。だから、寝かせろ」
「うん。わかった」
そっか。お肉食べたら治るんだ。そうだよね。ボクもお肉をおなかいっぱい食べたら元気が出るもん。
「ゼロが早く元気になるように、お肉たくさん獲ってくるね。獲ってくるね」
「わあった……から、二回言う…な……」
「ゼロ？」
返事がない。
「もしかして気絶しちゃったの？　大丈夫？　大丈夫？」
ぐー、といびきが聞こえた。眠っちゃったみたい。
ゼロを起こさないように、ボクはそっと洞窟（かくれが）の外に出た。まだ夜だったけど、外は月の光で明るかった。大きな月が空と海にひとつずつ。
ゼロが眠ってる間に、お肉を獲ってくるんだ。起きたらすぐに食べさせてあげられるように。

「うわぁぁぁあっ！」
ボクは思わず飛び起きた。本当はまだまだ眠っていたい時間だったけど。痛かったんだもん。何かがボクの顎の下にガスッて。あ、ゼロの足だ、これ。
「ゼロ、ゼロ。どうしたの？」
ボクは鼻先でゼロをつついてみる。
「どこか痛いの？　苦しいの？」
眠ってるときまで、こんなに暴れるなんて、すごく苦しいんじゃないかな。じっとしてられないくらい、痛くてたまらないとか。ゼロの傷は本当にひどいんだ。きっと夢の中でもつらかったんだと思う。
「ゼロ！　ねえ、ゼロってば！」
「眠い。寝かせろ」
「だって、すごく苦しそうだよ？　苦しそうだよ？」
「うるさい。二回言うな」
ものすごく機嫌悪そうな声。そんなに痛いんだ……。眠くて不機嫌になってるワケじゃないよね？
「どうやったら、ゼロのケガが早く治るんだろ？　ねえ、ゼロ」
ゼロがつらそうにしてるのって、イヤなんだ。見てるだけで、なんだかボクまでおなかの上

とにかく、お魚はダメ。キライなものなんて食べたら、もっと具合が悪くなっちゃうもん。ってことは、海じゃないところへ行かなきゃ。

ボクは海とは反対のほうへ向かって飛んだ。がんばってがんばって、翼がぐたってなるくらい飛んで。夜が明けるまで飛び続けて、ふと下を見てみたら……そこは砂漠だった。

いつの間にか、砂の国に着いてたみたい。見渡す限り、砂、砂、砂！　砂浜がどんどん大きくなって、海をぜーんぶ埋めちゃうくらい広がったら、海の国もこんな感じになるのかなあ？

でも、こんなに広いのに、お肉は見つからなかった。これが砂浜だったら、カニくらいはいるのにね。もしかしたら、砂漠の生き物って、貝みたいに砂の下にもぐって隠れてるのかも。

そりゃあね、人間もお肉といえばお肉だから、見つからなかったっていうのは正しい言い方じゃないかもしれないけど。

だって、端から端までぐるーっと飛んでみたけど、いたのは人間だけだったもん。

ただ、ゼロによく似たカタチの生き物を食べちゃうのって、なんかイヤなんだよね。たぶん、ゼロもイヤがるんじゃないかなあ……。

お魚でも人間でもないお肉を探して、ボクはもっと遠くへ飛んだ。やっぱり〝伝説のお肉〟は遠くにいかなきゃ見つからないと思うんだ。だって、〝伝説〟だもん。すぐに手に入るようなモノを、〝伝説〟なんて言わないよね？

おいしいお肉が見つかるといいな。ゼロがいっぺんで元気になるような、スーパー超絶すっごいお肉！　一口食べたら、ぱあって空から光が射してくるみたいな。そう、ゼロはちからがあがった、みたいになるお肉。

決めた！　〝伝説のお肉〟を探しに行こう！　探しに行こう！

と思って、飛び立ってみたんだけど。どこに行けば見つかるのかなあ。ゼロがいっぺんで元気になるようなお肉って。

大きなお月様がうつってる海を見下ろしながら、ボクは考えた。一生懸命、考えた。お肉……お肉……お肉……。海の中……お肉……海……。

海？　あ、海面すれすれにお魚がたくさん。月の光でぴかぴか光って、なんだか特別なお魚みたい。あれを食べたら、元気になれるかな？　捕まえてみようかな。

ううん、ダメだ。ゼロはお魚キライって言ってたもん。いつだったか、背中が青っぽく光ってるお魚をボクが捕まえたら、ゼロはちょっと顔をしかめてた。キライなのって訊いたら、ゼロは困ったみたいに目をそらして言ったんだ。

「サバはちょっとな……」

思い出すからって、ぼそぼそ言ってたけど、何を思い出すんだろ？　サバ食べておなかでもこわしたのかなあ？

帰るんだ。ゼロのところに……。え？」

二番めに大きい牛を捕まえようと思ったんだけど。ふと振り返ったら、人間がものすごく悲しそうな顔をしてボクを見上げてる。おじいさんとおばあさんが今にも泣き出しそうな顔で。

思い出した！　いつだったか、ゼロが言ってたんだ。山の国には「牧場」がたくさんあるんだって。山の国には小麦を育てる場所が少ないから、代わりにお肉を育てるんだって。

もしかして、ここは「牧場」で、ここにいる牛って、あのおじいさんとおばあさんが育てた……のかな？　だよね、きっと……。

「うわーん！　ごめんなさい！　ごめんなさい！」

ヒトのモノを盗るなんてダメ！　ゼッタイ！

お魚でも、人間でも、ヒトのモノでもないお肉を探して、ボクは別の国へと飛んだ。

なるべく人間が少ない国がいいな。そしたら、うっかりヒトのモノを盗ったりしなくてすむもん。誰かを困らせたり迷惑かけたりするのって、ボク、イヤなんだ。

家が少なくて、でも、砂の国みたいに生き物があまりいないところでもなくて……。

それで、やってきたのが森の国。ここなら、誰のモノでもないお肉が手に入るよね。鳥の声があっちからもこっちからも聞こえてくるし、生き物の気配がたくさんあるし。

ちょっと下に降りてみようっと。空からだと木が邪魔になって、地上の様子がわかりにくい

もっともっと遠くへ飛んで、くったくたになるまで飛んで、ふと下を見てみたら……。
「あいたたたっ!」
岩山に頭から突っ込んじゃった。下ばっかり見てたせいで、気づかなかったんだ。いつの間にか、山が真ん前に迫ってきてたこと。ちゃんと前を見て飛ばなきゃ……。
あ、ここって山の国だったんだ。って、よくよく見たら、お肉がいっぱい!　あっちにもこっちにも、牛とか羊とか山羊とか!　すごいすごいすごーい!　なあんだ、最初から山の国に来ればよかったんだ。
さっそく、牛を捕まえて……っと。これだけたくさんいれば、捕まえるのなんてカンタン!
へへっ。すごいでしょ。一番大きな牛を捕まえちゃった。
そういえば、朝から何も食べてなくて、お腹ぺこぺこだったんだ。ボク、牛肉って大好き!
「いただきまーす!」
うん、おいしーい!　やわらかくって、口の中でトロットロにとろけて、そのくせしつこくなくて。おいしいなあ。おいしいなあ。こんなにおいしい牛肉って、初めてかも!
「あ、食べちゃった」
ボクが食べちゃダメなんだってば!　ダメなんだってば!　ゼロのケガを治すためのお肉なんだから!
「やり直し!　今度こそ食べないもん。二番めに大きい牛を捕まえて、ゼロのところに持って

に頭が悪くてバカで物識らず？　いっぺん死んだほうがいいんじゃねーの？」
「死ねとか言っちゃいけないんだよ。いけないんだよ」
「はぁ？　バカは死ななきゃ治らないってコトバ、知ってますぅ？　ホント死んでくださいマジ死ね！」
もしかしなくてもボク、ひどいコト言われてるよね、これって。
「ダメよ。その子の言うとおり、死ねなんて言っちゃいけないのよ」
女の子？　妖精の女の子だ。
「死ねなんて言うのはいけないって言ってるあなた、こんなところで何をしているの？」
よかった。やさしそうな妖精さんだ。
「ボクね、〝伝説のお肉〟を探しにきたの」
「ああそう。それなら、あそこにあるわ」
妖精さんが指さすほうを見ると、大きな木の上に何か丸いモノがくっついてる。ゼロの頭と同じくらいの大きさの。ううん、もうちょっと大きいかな？　でも、想像してた大きさと全然違う。
「あれが〝伝説のお肉〟なの？　ずいぶん小さいなぁ」
あれくらいじゃ、ゼロは全然おなかいっぱいにならないよ。あんなの一口で食べちゃうよ。
「小さくても伝説は伝説。さあ、早く取りに行ってらっしゃい」

んだ。
でも、森って飛びにくいなあ。木の枝が引っかかるっていうか。ばきばき言っててイヤな感じっていうか。
「こら！　勝手に降りてきてんじゃねーよ！」
ん？　なんか声がした？　もしかして、降りちゃダメって言ってる？　気のせいかな？
「おい！　そこの間抜け面！」
なんだ、ボクのことじゃないよね。ボク、ドラゴンだもん。マヌケヅラじゃないもん。
「聞こえねーのかよ！　臭くて不潔で不細工なドラゴン！」
「えっ？　どこどこ？　ボク以外にドラゴンがいるの？」
「オマエだよ、オマエ！」
目の前を何か小さいモノが飛び回ってる。って、「臭くて不潔で不細工」ってボクのことだったの!?
「ひどいよ！　ボク、不細工じゃないよ？　不細工じゃないよ？」
「あー、そうかもな。じゃあ、訂正してやるよ。醜怪で醜悪でゲテモノ顔のアホ面ドラゴン！」
「しゅーしゅー？　ええと……なんかよくわからないけど、ボク、ひどいこと言われてるよね？　ていうか、きみ、だあれ？」
「オマエ、ドラゴンのくせに妖精も知らねーのかよ？　醜怪で醜悪でゲテモノ顔でアホ面の上

痛い痛い痛い痛い！　蜂が追いかけてくる！　ボクのせいじゃないよ！　やめてよ！　やめてよ！

とにかく、ボクは逃げ出した。

逃げて逃げて、飛んで飛んで……気がつくと、ボクはまた海に戻ってきてた。もう蜂は追いかけてきていない。ああ、助かった。

だけど、あの妖精さんたち、なんであんなヒドイことしたんだろ？　妖精さんって、小さくてかわいいのに、イジワルなのかな？　ううん、そんなことないはず。

もしかして、ボクが森の木をばきばきって折ったりしたから？　怒って仕返しをしたのかな？　そうだよね、きっと。理由もナシにヒドイことするはずないもん。

それにしても、もう夕方になっちゃったんだなあ。空も海も真っ赤っか。

「ゼロ、心配してるよね。帰らなきゃ」

とうとう〝伝説のお肉〟は見つからなかった。やっぱりボクじゃムリだったのかなぁ。ゼロに早く元気になってほしかったのに。

はあって大きなため息をついたら、下のほうで何かがバシャッと跳ねた。お魚にしては大きい……ような？

銀色に光る大きなウロコ、長いカラダと長いシッポ。

「シーサーペントだ！」

「そうなんだ。伝説は伝説なんだね」
「それから、伝説はすごくしっかりと木にくっついているの。思いっきり強く引っ張らないと取れないの。わかった？」
「うん。わかった。ありがとう」
伝説のお肉って、木にできるんだなあ。知らなかったよ。ん？　なんか、ブーンって音が聞こえるけど？　気のせい？
「早く！　早く！　早く！」
妖精さんに急かされて、ボクは〝伝説のお肉〟をしっかり口にくわえて、思いっきり引っぱった……！
「あいたたたたっ！」
口の中に何か刺さったよ！　刺さったよ！
「引っかかった引っかかった！　かわいそうなドラゴン！」
なんかブンブンいってる！　痛い痛い痛い痛い！
「蜂の巣の味はどう？　おいしい？　おいしい？　キャハハハハ！」
ボクをだましたんだね!?　ひどいよ！　ひどいよ！　って言ってやりたかったけど。
「かわいそうなドラゴン。頭も顔もかわいそう。みっともなくて、おバカでかわいそう。キャハハハ！」

があって。
「ええいっ！　えい！　えい！」
蹴って蹴って蹴って蹴って。
「わっ。巻き付いてる！　巻き付いてる！」
頭を蹴るのに夢中になってたら、シーサーペントのシッポがおなかの周りに巻き付いてた。
「痛いよ痛いよ！　はなしてっ！　やだっ！」
ものすごい力で海の中に引きずり込まれそうになる。ボクは思いっきりカラダをばたばたさせて逆らう。
「この……っ！」
堅い頭に噛みつく。少しずつだけど、牙が食い込んでいく。海水も一緒に飲んじゃって、むせそうになったけど、ボクは離さなかった。
ゼロ、ゼロ！　待ってて！　お肉、必ず持って帰るから……。

シーサーペントは思ったよりもずっと手強くて、やっと倒したときにはもう日が暮れていた。洞窟（かくれが）に戻ったのは、完全に夜。
ボクが何も言わずにいなくなったって、ゼロは怒ってたけど、ううん、怒る気だったんだろうけど、そんなのはシーサーペントを見て、全部どっか行っちゃったみたいだった。

あれって、お魚でも人間でもヒトのモノでもないよね!? あ、でも、ウミヘビの仲間だから、やっぱりお魚? ううん、海のへビだもん。魔物だもん。お魚じゃないもん!
「あんな大きいの……ボクに倒せるかなあ」
もしかして、ボクより大きい? ううん、そんなことないよ。そんなことないよ。うわわわわ。シャーッて脅かしてきた。シャーッて。
「こ、こわくなんかないもんっ!」
ボクはシーサーペントめがけて炎を吐いた。これなら離れてたって攻撃できるもんね。と、思ったら。
「あ、ズルい!」
水の中に潜っちゃった。やっぱり炎じゃダメなんだ。直接、蹴るとか噛みつくとかしないと。でも、それって、さわれるくらい近づかなきゃダメってことで。こっちも攻撃されるかもしれないってことで……。
「ううん! ゼロのためだもん! ゼロのためだもん!」
がんばらなきゃ。ゼロが早く元気になるように。ゼロにお肉を食べさせてあげるんだ!
大きく息を吸い込んで、ボクはシーサーペントに向かって飛んだ。
「えーいっ!」
シーサーペントの頭を思いっきり蹴る。水しぶきがあがった。どーん、って爪に重たい感触



「これ、キミが倒したのか？」

「そうだよ！　ほめていいよ！　うんとほめていいよ！」

ゼロが目を丸くしてシーサーペントを見てる。えっへん。すごいでしょ。ボク、自分よりも大きな敵を倒したんだよ！

「早く食べようよ！　お肉、いっぱい食べたら元気になるんでしょ？」

ん？　今、なんかバシャッて音がしたような？

「おい……。念のために訊くけど、こいつにとどめを刺したか？」

「トドメ？」

「やっぱり。こいつはたぶん仮死状態……うわあっ！」

言いかけたゼロを銀色のシッポが跳ね飛ばす。

「えええええっ!?　なんで？　なんで？」

さっきまで死んでたよ？　ぐたっとなってたよ？

「なんでじゃねえよ！　クソドラゴン！」

シーサーペント、起き上がってるし！　シャーッとか言ってるし！　もしかして、まだ生きてたってこと？　もしかしなくても……。

「見りゃわかるだろうが！」

「ご、ごめんなさい～！」

＊ アコール

武器物語（ウェポン・ストーリー）

Warning!

この短編にはネタバレが含まれています。ゲームプレイ後にお読みになることを推奨します。

早くなんとかしなきゃ。もういっぺん倒して……。
「うわあああん！　これ強いよ！　強いよ！」
海の外なのに。バシバシッてシッポで攻撃してくるし！　ああっ。洞窟が崩れそう！　うわっ！　またシッポで叩かれた！
「ああクソ！　失敗したっ。肉食ってりゃ治るとか、いい加減なこと言うんじゃなかった！」
「えっ!?　いいかげんなコト言ってたの!?」
ひどいや。ボク、一生懸命、〝伝説のお肉〟を探したのに！　砂漠にも山にも森にも行ったのに！
「ゼロのバカぁ！　うそつき！」
「いいから戦え！」
「わかったよ！　わかったよ！」
「二回言わなくていいッ！」
いたたたた！　またゼロの足が顎の下にガスッと……。でも、ゼロ、元気になってるよね？こんなに暴れてるんだもん。やっぱり、シーサーペントは〝伝説のお肉〟だったのかもしれないなぁ。
ゼロの蹴りとシーサーペントのシッポ攻撃でボコボコにされながら、ボクはちょっとだけホッとした。

時が経ち、国の威信を懸けた大戦で敵大将の首を討ち取り勝利を収めた黒き騎士。彼の体は既に白を超え透明で誰の目にも見えなくなっていた」

なんとも恐ろしげな話ですねえ。実際にあったんでしょうかねえ、人の身体が透明になるなんて。疑わしくないですか……って、わわわわ！　消えてる消えてる！　私の右腕が消えてる！　剣ごと消えてる！　まさかの実話！　それよりこの剣、呪われてる！　ははは早く剣を放さないとっ！

すみません。つい、取り乱してしまいました。この剣、危なくて使えたものじゃありませんね。解呪すれば、なんとか使える……？　どうでしょう？　でも、ここまで強力な呪いを解くとなると、時間がかかりそうです。何年ぐらいかかるでしょうか。まあ、剣はこれだけというわけでもなし、気長にやりますか。

では、次、行きましょう。

これはまた変わった形の武器ですね。丸い大きな輪に取っ手が付いてるだけでも妙なのに、その輪がトゲだらけって。いったいどうやって収納するんでしょうかね？　持ち歩くだけでも一苦労な気がしますが。味方も巻き添えになりそうですし。こんな物騒な代物を振り回しているヒトと仲間にはなりたくないですねえ。痛い目に遭うのがよほど好きなら話は別ですけど。

で、由来書はどこに……と。ええと……どこだっけ？　あ、これですね。

ああ、忙しい忙しい。
もう本当に忙しい。イヤになるほど忙しい。それでなくても武器屋なんて、商品の仕入れに手入れに値入れ、やることが幾らでもあって忙しいのに、新装開店前日ときたら！
身体がいくつあっても足りません。ああ、忙しい。
はい、私、武器屋のアコールと申します。え？　誰に向かってしゃべっているのかって？　いいじゃないですか、細かい事は。
とにかく、今日中に仕入れた品物を点検して、値段を付けて、店に並べなければ。でないと、明日、店を開けられません。武器屋のアコールが店を開けられないのでは、ただのアコールになってしまいますからね。
さて、と。まずは品物の点検をば。どれどれ、由来書は……と。
あ、由緒正しき武器には、どれも「由来書」って奴がついてましてね。その剣がどうやって作られたか、どう使われてきたか、そういった諸々を書き記したモノ。これがなかなか面白いんですよ。たとえば、刃がギザギザしてる、この剣の由来書ですが。
「鋸状の刃で相手の剣と肉を切り裂く剣。この剣をあまり使い過ぎると引き裂く時の振動で指がしびれ、蝋のように真っ白くなり体が動かなくなる。
今よりも何百年も昔、黒き肌の騎士はこの剣を使いこなし数々の武勲を立てていった。
次第に漆黒の体は雪のように白くなってゆく…。

ど、これほどの逸物の穂先となると、それなりの鍛冶屋さんにお願いしないと難しいでしょうし。
ああもう！　この忙しいのに壁に穴あけるわ、売り物壊すわ……。些か自己嫌悪です。反省。
反省しつつ、次の剣を……と。
「鬼に家族を惨殺された鍛冶屋が……」
ストップストップ！　見覚えのある文章だと思ったら、これ、私が書いた由来書じゃないですか！　ああ、ハズカシイ！
それに、この武器、封印が解けかけてますね。うっかり封印が解けたりしたら、魔術師の幽霊が出てくるわけで……。ああ、危ない危ない。店に並べる前に再封印ですね。うまく封印できるといいですけど。これも時間がかかるかもしれません。
次は？
「兵士長はその『死』を確かめる
己の感触は天地の涙へ
流れる血は闇から光へ
教えは命を奪い、新たなる命を与える」
……全然、意味がわかりませんが？　これを書いた人、何を考えていたんでしょう？

「昔々ある所に、いつも一緒に遊ぶ三人の子供が……」

ん？　この妙な武器、よく見たら輪のところに血が付いてますよ？　このカタチの武器に血痕って不吉過ぎやしませんか？　気味が悪い取り合わせですよね。それに、血液は刃物を錆びさせる原因になりますし。売り物にする前に、キレイに落としておかないと。

というわけで、これは後日、店に出すことにしましょう。何より、血の付いた剣なんて、新装開店記念にはふさわしくありませんから。

さて、お次は。

やっぱり見た目で言えば槍が一番ですかね。いや、剣や格闘装具が地味って言ってるんじゃないんです。槍が派手過ぎるだけで。ほら、槍って長いし、目立つし。

たとえば、この槍とか。見てくださいよ。惚れ惚れする出来の良さじゃないですか。由来書もまたドラマティックで。昔、飛べない竜がいた、とか。それだけで、何やらワクワクしてきませんか？

いいですねえ。こうして手に取っているだけで、何だかその気になるっていうか。こう、えーいっ！　って、やりたくなってしまいますね。えーいっ！　あああああっ!?

やってしまいました……。穂先が壁にぶっすり。こんなに深々と刺さってると、引き抜くの大変……。あ。ダメだ、これ。壁にぶつけたせいで、穂先にヒビが入ってる。修理しないと。でも、穂先の修理って時間がかかるんですよね。柄だったら私でも直せますけ



曲がりなりにも「由来書」なんですから、誰が読んでもわかるように書くべきではありませんか。

それに、この槍も穂先が少しばかり曲がってます。よくよく見ないと気づかない程度ですが。でも、わずかであっても不良品は不良品。このまま売るわけにはいきません。さっきの槍と一緒に修理に出すとしましょう。

由来書のわからなさ加減で言ったら、こっちの大剣も負けてませんね。鉄鉄鉄鉄鉄って。全く、誰ですか、こんな文章を書いたのは！ 大いに反省して欲しいものです。

それはさておき、この武器も店頭に出すのは無理でしょうね。何しろ、折れてますし。あ、でも、これに限っては、折れてるほうが風情があるというか、曰くありげに見えるというか。まるで何かのオブジェのようではありませんか。このまま店に出しても。いや、傷物は傷物ですし。いやいや、見た目を優先するならばこれはこれで。……迷いますねえ。ひとまず保留にしておきましょうか。

で、こっちはダメ。錆びてるし。これもいけません。こっちも無理。ということは、えーと……。あれ？

結局、店に出せるのは、この包丁の親分みたいな武器が一本だけ!? いくらなんでも、剣が一本だけって、武器屋として如何なものでしょう。うーん。

あ、でも。モノは考えようで。最初はこれ一本で十分かもしれません。概ね武器という

できた。さて、行きましょうか。もうすぐあの人も来ますしね。
ああ、忙しい、忙しい、忙しい……。

ものは、安いとは言えない買い物ですし。状態が今ひとつの武器を何本も並べておくより、使いやすくて良い品をひとつだけ置いておくほうが良心的というものです。
それに、武器は使ってナンボ。武器屋としては、大量にお買い上げいただけたとしても、ろくに使わずに死蔵されるのって悲しいというか寂しいというか。利益が出るのは商人として喜ばしいことですが。
それよりも、一振りの剣をしっかりキッチリ使い込んでいただいたほうがうれしい。そういうものです。
よし、そうしましょう。お客様には、この剣を責任持って使いこなしていただく。これを十分に使い込んだ頃には、他の武器の修理も終わっているでしょうし、また新しい仕入れもあるかもしれませんし。
じゃあ、この剣「断罪の咆吼」を陳列して、と。名前も見た目も変わった剣ですが、そこはそれ。あとは回復アイテムを少々。うん、これで準備ＯＫですね。
さて、そろそろ出かけなければ。お店の準備以外にも、私にはいろいろと仕事がありますしね。開店当日に店主が留守っていうのもアレですけど、やむを得ません。まあ、書き置きというか、張り紙でもしておけばいいでしょう。
ええと、お客様へ……。当店は武器とアイテムを扱う店舗ですが、店主多忙の為……と。うん、よしよし。これを店の入り口に貼って。

ワン
鏡よ、鏡

Warning!

この短編にはネタバレが含まれています。ゲームプレイ後にお読みになることを推奨します。

う、あの頃、世界はまだ荒れ果てていて、姉さんはたくさん敵を倒さなきゃならなくて。僕はそれを手伝った。どれくらい姉さんの手助けができたかは、わからないけど。

それに、僕は強くならなきゃいけなかった。ちゃんとゼロを殺せるように。もしも姉さんがゼロに負けたら、僕が代わりにゼロを殺さなきゃならない。

「大丈夫。弟(キミ)ならできる」

姉さんは僕を安心させるつもりでそう言ったんだろうけど。でも、姉さんは肝心なことに気づいてなかった。

僕がゼロを殺すってことは、姉さんはゼロに殺されてるってことなんだよ？　そんなのいやだよ。姉さんが殺されるなんていやだ。

姉さんがいなくなったら、誰が此処に来てくれるの？　姉さんがいなくなったら、僕は誰と話せばいいの？　姉さんがいなくなったら、僕は……。

僕がずっと浮かない顔をしていたのは、戦うのがいやだったからじゃない。ドラゴンの牙から作った剣なんか使いたくない。「その日」がずっと来なければいいのに。

ずっとあの狭い部屋にいたい。姉さんが来てくれて、僕を優しく抱きしめてくれて。ずっと。

それが僕の願いだった。でも。

僕は此処に居なければならなかった。
僕は此処に居てはならなかった。
僕は此処に居続けなければならなかった。
僕は此処に居続けてはならなかった。
ただ姉さんのためだけに。

僕は此処に居なければならなかった。
この塔の一室に。目に映るものといえば、石の壁と鉄の扉。窓はうんと高いところにひとつきり。小さな寝台と小さな椅子。部屋の端から端まで十三歩。
空の色さえ見えない塔の中。それが僕の世界だった。
此処を知っているのは、姉さんだけ。他は誰も知らない。この部屋には、姉さんしか来ない。だから、僕は姉さん以外の人間と言葉を交わしたことがなかった。
僕が会話したことがあるのは、姉さんとドラゴンのガブリエラ。ただ、ガブリエラは姉さんとばかりしゃべっていたけど。ガブリエラは口が悪くて、僕にはちょっと意地悪で。それでも、僕はガブリエラが嫌いじゃなかった。だって、姉さんはガブリエラが大好きだったから。
時々、姉さんと僕はガブリエラの背に乗って、空を飛んだ。戦いの地に赴くために。そ

のことを知ってるんだよ。

そして、姉さんはゼロに殺された。僕は言いつけどおりにゼロを殺した。この世界からウタウタイは一人もいなくなった。

でも、姉さんはその先を教えてくれなかったよね。何をすればいいのか。どこへ行けばいいのか。

僕は姉さんが死ぬってことと、ゼロを殺さなきゃならないってことで頭がいっぱいだったから、その先のことなんて考えてなかった。ちゃんと訊いておけばよかったって後悔したけど、もう遅い。姉さんは死んじゃってたから、もう答えはわからない。

途方に暮れた僕の目に飛び込んできたのが、大聖堂のステンドグラス。割れてしまっていたけれど、きらきら光って綺麗だった。

そうだ、姉さんのために教会を作ろう。姉さんを讃える新しい教会を作ろう。

あのときは、とても素敵な考えだと思ったんだけど。姉さんのために。姉さんのために。

そう思って大聖堂の外に出てみたけれど。

外の世界は広すぎて、姉さんのいない世界は寂しすぎて、たった一人は恐ろしすぎて。

僕は逃げた。再び此処に逃げ込んだ。安全で、心地よくて、何もしなくていいこの部屋に。

僕は此処に居続けなければならなかった。

僕は此処に居てはならなかった。

とうとう「その日」が来てしまったから。僕を迎えに来た姉さんは、ひどく厳しい顔をしていた。だから、僕にはすぐにわかった。これから姉さんはゼロと殺し合うんだなって。

「大丈夫だよ。姉さんに言われたとおり、ちゃんとやれる」

僕がそう言ったら、姉さんはびっくりしてたよね。まだ何も言っていないのに何故って。でも、わかるよ、何も言われなくたって。それくらい。

僕は姉さんほどには頭が良くないから、難しい考えはわからないけど、姉さんがどんな気持ちでいるのかはわかる。悲しんでいるのか、喜んでいるのか、怒っているのか。うれしいのか、寂しいのか。そばにいるだけで。だって、僕達は双子だもの。

そう、僕にはわかってた。もしも、姉さんがゼロを倒したとしても、僕は二度と姉さんには会えなかった。姉さんは自分も死ぬつもりだったんだよね？

わかってたから、一度だけ、姉さんを引き留めた。駄々をこねた。行っちゃいやだって泣いた。

「心配するな。私は負けない」

姉さんは少しだけ困った顔をしてた。でも、僕は姉さんを困らせたかったわけじゃない。二度と会えない、これが最後だって僕が知ってるってこと、わかってほしかったんだ。

全部、わかってるから、安心して。姉さんが思ってるよりもっとたくさん、僕は姉さん

だから、僕は此処に戻ってきたんだ。此処なら何もしなくていい。こんな僕が居てもいい場所は、もう此処しかないんだ……。

でも。どんなに待っても、もう姉さんは来てくれない。二度と会えない。いやだ。会いたい。姉さんに会いたい。姉さんに会いたい。姉さんに会いたい。姉さんに会いたい……。

ああ、そうだ。本当に会えるわけじゃないけど、姉さんの姿を見るだけならできるよね。だって、僕は姉さんから作られた。同じ姿に同じ顔。僕が姉さんの服を着て、鏡を見れば。

ほら、こんなにそっくり。まるで姉さんがそこに立ってるみたいだ。

姉さん、会いたかった……。

「私も会いたかった」

こんなにそっくりなのに。目の前に姉さんがいるのに。手を伸ばせば届きそうなのに。僕の指先に触れるのは、冷たい鏡。この境界線の向こうに姉さんがいるのに。どうして、僕はそこへ行けないんだろう？　どうして、僕は此処にいるんだろう？

どうして、僕は一人きりなんだろう？　どうして、姉さんは僕を置いていったんだろう？

ううん、違うよね。姉さんは僕を置いていくつもりなんてなかったんだよね。本当は僕

この部屋のことは誰も知らない。僕は「最後の切り札」で、僕の存在は誰にも知られちゃいけなかったから。たぶん、姉さんは他の妹達にも秘密にしていたと思う。
この部屋の扉は外からは見えない。姉さんがそういうふうに作った。誰かが不用意に開けたり、中に入って来たりしないように術を掛けた。だから、この場所に部屋があるなんて、誰も知らない。
この部屋には鍵がない。姉さんは僕を閉じこめるつもりなんてなかったから。ただ、僕は一人で外に出たことなんて一度もなかったし、出たいとも思わなかった。僕が外に出るのは、姉さんが迎えに来たときだけ。
姉さんはもう迎えに来ない。だから、此処に戻ってきて真っ先にやったのは、二度と扉を開けられないようにすることだった。内側からめちゃめちゃに。もう二度と、外に出られないように。
外の世界で僕にできることなんて、何ひとつないから。姉さんの手伝いはできても、僕が一人でできることなんてなかったんだ。ゼロを殺すこと以外は。
姉さんを待って、姉さんが退屈しのぎにと持ってきてくれた本を読んで。剣の稽古をして。それが、この部屋での僕の日々。
そんな僕がたった一人で外に出て、生きていけると思う？　姉さんは本当にそう思ってたの？



も連れていくつもりだったんだよね。

姉さんはゼロを殺さなきゃならなかった。ゼロを殺した後は姉さんも死ななきゃならなかった。ウタウタイは世界を滅ぼす花の苗床だから。世界を滅ぼす花は駆除しなきゃならないから。

でも、花は逃げる。駆除されまいとする。だから、ゼロはしくじった。姉さんはゼロと同じ轍を踏まないように、最後の一人が確実に死ぬように仕掛けをした。

その仕掛けが僕。この部屋で、姉さんは僕にゼロを殺す練習をさせた。壁に人の形に線を引いて、心臓の位置に×印をつけて、そこに剣を突き立てる練習。僕がしくじらないように。間違いなく、ゼロの心臓を一突きにできるように。

×印のところには、ちゃんと穴が開けてあって、人を刺したときと同じように剣が貫通するようになってた。すばやく、正確に、何度も。僕は姉さんに言われるままに剣を突き立てた。

でも、それってゼロだけを殺す練習じゃなかったんだよね？　姉さんを殺す練習でもあったんだよね？

もしも、生き残ったのが姉さんで、花が姉さんを死なせてくれなかったとしたら。姉さんはあの壁の向こう側に立つつもりだったんだよね？　僕は言われるままに剣を突き立てて……いつもみたいに。練習のつもりで……でも、確実に姉さんを殺したんだろう。

姉さん、僕を叱ってよ。悪い子の僕を叱って。僕は悪い子なんだよ。そこから出てきて叱ってよ。

どうして何も言ってくれないの？　すぐそこにいるのに。なんで叱ってくれないの？

鏡の中の姉さんは、ちっとも叱ってくれなくて。ただ、泣き出しそうな顔でじっと僕を見てる。

この顔、知ってる。覚えてる。僕と抱き合っているとき、姉さんはいつもこんな顔をしてた。

それが不思議でたまらなかったんだ。どうして、そんな顔をするの？　僕は気持ちいいのに、姉さんは気持ちよくないの？　どうして？　同じことをしているのに、どうして姉さんは泣き出しそうな顔しているの？

間違ったことだからって、姉さんは言った。姉と弟はこんなことをしちゃいけない。こんなの間違ってる。わかってるけど止められないって。ひどくつらそうに、切なそうに。

僕にはよくわからなかった。姉と弟がこんなことをしちゃいけないなら、他の人となら、いいってこと？　僕にはそっちのほうが、よほど悪いことに思えるけど？

そしたら、姉さんはもっと困った顔をした後、びっくりするくらい優しい顔をして、こう言ったんだ……。

「そうだな。弟はそれでいい」

姉さんをこの手で殺してしまったら、僕は生きていけない。迷わずその場で剣を自分に向けてた。姉さんから作られた僕は、姉さんほどには花の力が強くないから、たぶん、それで死ねる。僕が死んでしまえば、花の影響を受けた者はいなくなる。

そう、姉さんは僕を一人にするつもりなんかなかった。必ず僕が姉さんの後を追うって信じてた。ゼロを殺した後、どうすればいいのか、教えてくれなかったんじゃなくて、教える必要なんてないと思ってた。

裏切ったのは、僕。間違えたのは、僕。

ゼロを殺した後、僕がしなきゃならなかったのは、その場で姉さんの後を追うこと。だって、あのとき、僕はウタウタイを殺せる武器を手にしていたんだから。僕はホンモノのウタウタイじゃないけど、普通の剣を普通に使っただけじゃ死ねない。

うん、試してみたんだよ。此処へ戻ってきて、真っ先に。普通の剣を使って。だって、ゼロを殺したあの剣は、大聖堂に置いてきてしまったから。

バカだよね。扉をめちゃめちゃに壊して、二度と開けられないようにしたのは僕自身。だから、剣を取りに行くこともできない。此処に僕を殺せる武器はない。

僕はずっと此処に居なきゃならない。何もできないまま。安全で、居心地がよくて、何もしなくていい、この部屋に。

僕が間違えたせい。何もかも僕のせい。

なんだ、僕はいつだって姉さんに会えるじゃないか。僕達は双子なんだから。簡単なことだったんだ。

「私はどこにも行かない」

うん。約束したよね。いつだったか、僕が怖い夢を見て泣いたとき。本当は、僕が眠っている間に此処を出て行くつもりだったんだろうけど。姉さんは身支度（みじたく）を終えていたから。でも、あの夜はずっとそばにいてくれた。朝まで僕の手を握っててくれた。

「弟（キミ）のそばにいる」

本当に？　もうどこにも行かない？　一緒にいてくれる？

「ああ。ずっと一緒だ」

そうだよね。此処に僕を殺せる武器はない。僕は死なない。だから、姉さんも死なない。そうか。僕が死ななかったのは、間違いじゃなかったんだ。僕が生きてれば、姉さんも生きていられるもの。僕は姉さんが死ぬのが何よりもいやだった。姉さんさえ生きていてくれれば、他の誰が死んだっていい。世界中の人達がみんな死んでしまっても構わない。

僕、間違ってないよね？　僕、悪い子じゃないよね？

「うん。弟（キミ）はいい子だ」

姉さん、聞いてよ。僕ね、姉さんのために新しい教会を作ろうと思ったんだよ。姉さんと、それから……忘れちゃいけないな、ガブリエラのことも。姉さんはガブリエラが大好

ああ、そっくりだ。あのときの姉さんに。
「そうか？」
うん。少しだけ眉根を寄せる癖。姉さん、気づいてた？
「いや。知らなかった」
だよね。僕、わざと姉さんには教えなかったんだ。
「なぜ？」
そう、そうだよ。そんなふうに首を傾げて。何かを尋ねるとき、姉さんはそんな顔をする。その顔が好きだったから、僕だけのものにしておきたかったんだ。
ねえ、僕は姉さん以上に姉さんのことをよく知ってるんだよ。
自分がどんな顔をして笑うかなんて、自分じゃ見えないけど、僕には見えたから。姉さんの表情のひとつひとつも、自分じゃ気づいてない小さな癖も。
顔だけじゃない。身体の隅々まで全部知ってる。どこをどうすれば、姉さんがどんな顔をするか。どんな声で、どんな息づかいで……。
「いや…だ……」
少し慌てた様子で視線を泳がせて、僕が駄々をこねるときみたいに首を横に振って。可愛かったな、あのときの姉さんは。ふふっ。僕以外、誰も知らないよね？　僕だけが知ってる、僕だけの姉さん。そう、その顔だよ……。

いい名前だろう？　きっと大勢の信者達が集まってくる。ウタヒメを讃えるために作った教会。ウタヒメが呼んだ天使を讃えるために……。

ただ姉さんのためだけに。



DRAG ON DRAGOON NOVEL PRELUDE

ドラッグ オン ドラグーン　ノベル プレリュード

執　筆　映島 巡
原　案　ヨコオタロウ
監　修　ヨコオタロウ/名取 佐和子

監修・協力
『ドラッグ オン ドラグーン』シリーズ開発・宣伝チーム
カバー・表紙デザイン
株式会社metamo [http://www.metamo.co.jp/] 渡部 岳
本文デザイン
株式会社wonder
編集・制作
株式会社スクウェア・エニックス書籍編集部

病のせいで眠りは浅く、何より私は殺気というものに過敏なたちだった。考えるよりも早く、私は男の首を掻き切っていた。

でも、私が着飾るのをやめたからって、貧しい人たちがお腹いっぱい食べられるかっていうと、それは別の問題だと思いますのよ。だって、私の衣装部屋にあるドレスはお金を出して買ったわけではないし。前の持ち主を倒したから、私のモノになっただけ。

国の人たちからお金を搾り取って無駄遣いしたのは、私じゃなくて、前の領主ですもの。

「この世界はね、わたしの好きなものと、
ものすごく好きなものとで出来てるんだよ」

今日は、お人形たちと「悪者退治ごっこ」をしました。

ワン姉さんのお人形とトウ姉さんのお人形、それから、フォウとファイブのお人形も用意して、悪い領主のお人形をやっつけさせました。お人形だから、ウタノチカラはまねできなかったけど、みんなで力を合わせて戦うところは、じょうずにまねできたと思います。

とっても楽しかったけど、悪い領主のお人形はこわれてしまいました。

また新しいお人形をつくらなきゃ。遊ぶのも楽しいけど、やっぱりワタシはつくるほうが好きです

「なぜ、私は殺すんだろう？
これだけ殺してきたのに、わからない」

幸いなことに、お相手には不自由しませんもの。男でも、女でも、もうよりどりみどり。一晩に何人でも。

だから、考えごとはもうおしまい。手に入らないモノのことなんて、どうでもいいの

DRAG-ON DRAGOON

Since 2003